

長岡市埋蔵文化財調査報告書

新町上の原遺跡

—県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2009

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、新潟県長岡市小国町新町字谷内田364番地ほかに所在する新町上の原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査原因は新潟県による県営ほ場整備事業であり、調査主体は長岡市教育委員会である。
3. 遺跡確認試掘調査に要した経費は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助金交付を受けた。本発掘調査に要した経費の90%は新潟県が負担し、農家負担分10%については、長岡市教育委員会が負担した。また、長岡市教育委員会負担分については、国庫および県費の補助金交付を受けた。
4. 遺物の註記は、以下のとおりである。
個別上げ　遺跡略号（AU）+遺物番号　　（例）AU-1000
それ以外　遺跡略号（AU）+層序名　　（例）AU-IV
また、調査区西側に設定したサブトレーンチから出土した遺物については、末尾に「サブトレ」を付記した。
5. 土層断面図は簡易遺り方実測（1:20）で作成した。
6. 土器の実測図・トレース図・写真、及び石器実測図・写真的作成は有限会社ペントラボに委託した。石器実測図の一部と石器トレース図については調査担当が作成した。
7. 一部の石器については、竹之内耕氏（フォッサマグナミュージアム）に石材鑑定を依頼した。
8. 本書は本文と巻末図版（図版・写真図版）とで構成される。
9. 本書の執筆・編集は調査担当が行った。
10. 本書の内容は先行する全ての報告・記載に優先する。
11. 調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
調査担当　新田 康則（長岡市教育委員会科学博物館 主任）
調査員　山賀 和也（長岡市教育委員会科学博物館 学芸員）
事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）
土木作業管理者　中沢 一夫（株式会社平野建設）
測量技師　寺口 由美子（株式会社みくに考古学研究所）
調査補助員　小川 真紀
発掘作業員　青柳 光政 小林 サトミ 竹井 忠敏 竹部 久子 田中 キヨ子 田中 弘師
　　　　　　中沢 タツ 中村 英巳 中村 ユキ 野沢 一成 峯村 栄 山岸 健松
　　　　　　吉野 大央

12. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

池田 淳子 石坂 圭介 萩野 早苗 工藤 敏久 佐藤 雅一 白井 紗子 杉原 敏夫 高橋 武治
竹之内 耕 寺崎 裕助 長澤 展生 宮川 誠一 山岸 美佐子
株式会社植木組 中里北地区ほ場整備推進委員会 新潟県教育庁文化行政課
フォッサマグナミュージアム 特定非営利活動法人歴史・環境・まちづくり

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の位置	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 調査の方法と経過	4
1 遺跡確認試掘調査	
2 本発掘調査	
第Ⅳ章 調査の結果	6
1 遺跡の性格	
2 調査区の堆積状況	
3 遺構と遺物の分布	
4 遺物各説	
第Ⅴ章 まとめ	14
参考文献	

挿図・表目次

第1図 中里北地区区画図	1	図版1 遺跡全体図・土層断面図	図版27 石器実測図⑥
第2図 江戸時代初期ごろの洗浄川		図版2 層位別土器分布図(II層)	図版28 石器実測図⑦
旧流路(推定)と周辺の遺跡	2	図版3 層位別土器分布図(IV・IV'層)	図版29 東側トレーンチ出土遺物実測図①
第3図 小国地域の遺跡	3	図版4 層位別土器分布図(V層)	図版30 東側トレーンチ出土遺物実測図②
第4図 試掘トレーンチ配置図	4	図版5 系統別土器分布図①	写真図版1 調査写真①
第5図 調査区全体図	7	図版6 系統別土器分布図②	写真図版2 調査写真②
第6図 木杭列配置図	7	図版7 系統別土器分布図③	写真図版3 調査写真③
第7図 時期別土器分布図	8	図版8 系統別土器分布図④	写真図版4 調査写真④
第1表 本発掘調査全体工程表	5	図版9 系統別土器分布図⑤	写真図版5 出土遺物写真①
第2表 繩文土器觀察表	12	図版10 系統別土器分布図⑥	写真図版6 出土遺物写真②
第3表 石器觀察表	13	図版11 土器実測図①	写真図版7 出土遺物写真③
		図版12 土器実測図②	写真図版8 出土遺物写真④
		図版13 土器実測図③	写真図版9 出土遺物写真⑤
		図版14 土器実測図④	写真図版10 出土遺物写真⑥
		図版15 土器実測図⑤	写真図版11 出土遺物写真⑦
		図版16 土器実測図⑥	写真図版12 出土遺物写真⑧
		図版17 土器実測図⑦	写真図版13 出土遺物写真⑨
		図版18 土器実測図⑧	写真図版14 出土遺物写真⑩
		図版19 土器実測図⑨	写真図版15 出土遺物写真⑪
		図版20 土器実測図⑩	写真図版16 出土遺物写真⑫
		図版21 土器実測図⑪	写真図版17 出土遺物写真⑬
		図版22 石器実測図①	写真図版18 東側トレーンチ出土遺物写真①
		図版23 石器実測図②	写真図版19 東側トレーンチ出土遺物写真②
		図版24 石器実測図③	
		図版25 石器実測図④	
		図版26 石器実測図⑤	

第Ⅰ章 調査に至る経緯

県営は場整備事業の計画に伴い、小国町教育委員会（当時）は平成13年および平成15年に分布調査を実施し、遺物が採集できた地点を中心に試掘調査を実施してきた。その結果、中里南地区において水上遺跡（弥生・平安・中世の集落跡）などが発見されている。

県営は場整備事業（担い手育成型）中里北地区の事業地についても、平成13年12月に実施された分布調査の結果を踏まえて、平成14年度以降試掘調査を実施してきた。平成18年10月に実施した調査では、縄文時代の石器製作跡である上川原遺跡を発見している。そして、今回の報告に係る試掘調査は、平成19年度秋施工区および平成20年度施工区、合計約200,860m²を対象としたものである。

平成19年10月3日付け長教博第255号・平成19年10月12日付け長教博第294号で県教育委員会教育長に文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査を報告し、10月11日～11月2日に試掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代中期から後期にかけての埋蔵文化財包蔵地と、中世の埋蔵文化財包蔵地を確認した。前者は南に隣接する段丘上に位置する新町上の原遺跡の北縁であると判断し、平成20年2月21日付け長教博第441号により遺跡範囲変更の手続きを行った。一方、後者については小字名から「谷内田遺跡」と命名し、平成20年2月21日付け長教博第442号で周知化の手続きを行った。

そして、埋蔵文化財保護行政上の立場から、遺跡範囲内における開発についての取扱い協議を重ね、谷内田遺跡については保護盛土層等の設定によって遺跡が現状保存されることとなったが、新町上の原遺跡地内においては立地・工法等の変更是極めて困難であり、本発掘調査の実施が避けられないという方向性が示された。

こののち、新潟県長岡地域振興局長から市教委経由で県教育委員会教育長に文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知が行なわれ（平成20年2月29日付け長教農第4000号）。これに対し、新潟県教育委員会教育長から平成20年3月11日付け教文第1354号の2により工事前に発掘調査を実施するよう通知された。

この通知により、平成20年4月1日付け長教農第3001号で、新潟県長岡地域振興局農林振興部長から市教委教育長に対し、新町上の原遺跡における本発掘調査の依頼があった。市教委はこれを受諾し、平成20年5月8日付けて受託契約を締結した。

その後、平成20年6月5日付長教博176号で、県教育委員会教育長に対し文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査の着手を報告し、本発掘調査を開始した。



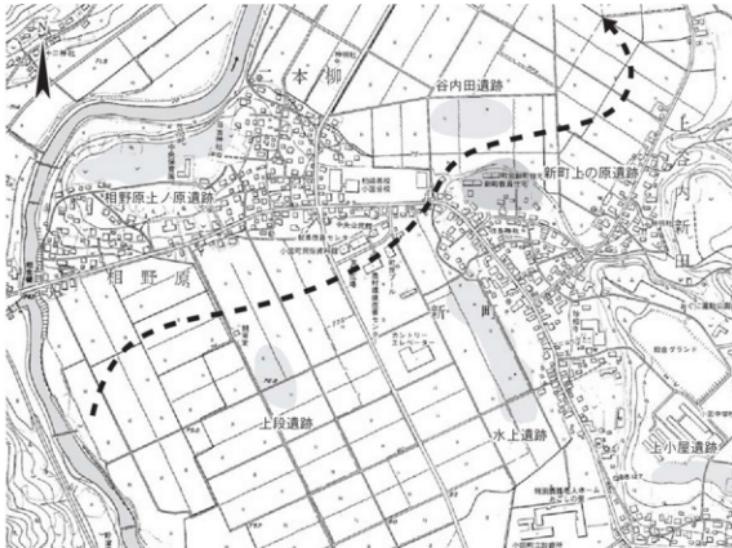
第1図 中里北地区工区図

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置（第2図）

新町上の原遺跡は新潟県長岡市小国町新町地内に所在する。遺跡が立地する小国地域（旧刈羽郡小国町）は、東は関田山脈、西は八国山脈に囲まれた盆地で、南北に貫流する渋海川に沿って河岸段丘が形成されている。渋海川は十日町市（旧東頸城郡松之山町）天水山を水源とし、現在は長岡市下山で信濃川と合流している。流路延長約80kmに対し、47箇所にも及ぶ漸替が確認されており〔野口・大熊 2004〕、かつては著しい蛇行と洪水によって特徴づけられる河川であった。史実、江戸前期において小国地域南部の村落は度重なる水害を避けるために激しく移転・移動を行っている。例えば、現在の新町集落は、現在の相野原字屋敷田にあった村が、天和検地以前に度重なる水害を逃れ移転したものと伝えられているし、二本柳村も貞享～元禄年間にかけて東に移動した。さらに上新田・下新田の二村に至っては、享保年間に起きた大規模な洪水により居村全部が川欠けし、現在の原小屋地内に移転している、という状況である。新町上の原遺跡の集落部分は、現在の新町集落とほぼ重なる位置、江戸時代の農民が渋海川の洪水を逃れて新たに居を構えた洪積段丘上に立地している。

また、江戸前期までの渋海川は、現在の相野原・新町集落の間を北東方向に流れ、上谷内集落で蛇行して北西に向かう流路をとっていた。今回の調査地点付近に江戸時代の船着場があったという伝承があるが、この旧流路に関連するものであろう。試掘調査で発見した谷内田遺跡は、出土遺物から13世紀初め～15世紀にかけて存続したと推測されるが、川辺の微高地に立地した集落であることが想起される。



第2図 江戸時代初期ごろの渋海川旧流路（推定 = 破線）と周辺の遺跡（1:10,000）

2 周辺の遺跡（第3図）

小国地域では、洪積丘面に縄文時代の遺跡が点在し、丘陵の尾根上に中世から戦国時代の山城が残されるという傾向があり、他時期の痕跡は希薄である（第3図）。しかし、近年の県営は場整備事業に係る遺跡確認試掘調査によって、今まで遺跡が確認されていなかった沖積地に弥生時代から中世の遺跡が確認されている。水上遺跡（603）は平成14年に発見された遺跡で、平成15年に本発掘調査が実施されている。弥生時代中期の栗林式土器とともに大形の石包丁が出土して注目を浴びたが、9世紀中～後葉、そして13世紀～15世紀（主として13世紀後半と14世紀後半）の造構・遺物も出土している。上段遺跡（604）は相野原觀音堂の南側で発見された遺跡であり、試掘調査によって柱穴と溝が検出されている〔池田 2006〕。出土遺物は13世紀後半（珠洲焼片）及び14世紀後半（青磁碗・珠洲焼片）が主体となる。



第3図 小国地域の遺跡（1:75,000）

第III章 調査の方法と経過

1 遺跡確認試掘調査（第4図）

調査の方法 平成19年度秋施工区及び平成20年度通年施工区に対する試掘確認調査は、平成19年10月11日から11月2日までの日程で実施した。主に切土工法が予定されている範囲に対し、合計82箇所のトレチ調査を行った。調査面積は約1006.8m²であり、これは開発面積の約0.5%に相当する。

調査は0.45m級バックホウによるすき剥ぎによって進め、遺物が検出された時点で、ジョレンによる人力掘削に切り替える、という方法を採った。遺物の出土位置情報および遺構図はトレチ調査を基準とした簡易やり方実測(1:20)で記録した。記録写真の撮影にはキャノンEOS-Kiss digital(レンズ18-55mm)を使用し、JPG形式で記録した。

調査の結果 当該区域には縄文時代及び中世の包蔵地を確認することできた。前者は調査区域南の河岸段丘上に立地する新町上の原遺跡の北縁に該当する。一方、後者は新発見の遺跡であり、小字名に基づき「谷内田遺跡」と命名した。谷内田遺跡は、掘立柱建物や溝状遺構を検出したほか、中世土師器と併せて舶来青磁片や羽口等が出土しており、13世紀以降の比較的大きな集落であると推測される。この遺跡については、協議の結果、工事計画(基盤高など)の変更により、現状保存が図られることとなった。この範囲については、平成20年9月3日から工事立会いを実施し、施工状況を確認した。



第4図 試掘トレチ配置図 (1:5,000)

2 本発掘調査

調査の方法 試掘調査の結果と開発計画とを勘案して本発掘調査区を設定した。調査区が概ね10×12mになることから、10mメッシュを設定しなかった。

表土層（I層）・中間の無遺物層（III層）は基本的にバックホウで掘削した。遺物包含層（II・IV・V層）についてはネジリガマを用いた人力作業で面的に調査した。

遺物と造構の位置情報はトータルステーションで記録した。また調査区の土層図は簡易やり方実測（1:20）で作成した。記録写真的撮影には、ニコンFM2（レンズ35-70mm）とキャノンEOS-Kiss digital（レンズ18-55mm）を併用し、35mmリバーサル・フィルム及びJPG形式で記録した。

調査の経過 6月10日に調査器材と仮設を搬入・設置した後、調査区西（平成19年度試掘調査区）に幅5mの層位確認用のトレンド（以下ではサブトレンドと呼称）を設置した。この際、トレンド底面から遺物が出土し、灰色砂礫層上位（=V層）にも遺物分布が及んでいることが判明した。また、ほ場整備工事用の基準点を用いて調査用の基準点を設定した。基準点移動については、ほ場整備工事の請負業者である（株）植木組から御助力頂いた。6月11～13日にかけてI層（=表土）を掘削した。試掘調査の報告【長岡市教委2008】でも記述したとおり、I層には多量の遺物が含まれているため、出来る限り遺物を回収するよう努めた。6月16・17日でII層を調査した。II層上面で木杭列を検出した。木杭はI層との層界で削平されていることから、一世代前の水田に関連するものと推測される。II層の調査終了後、III層（水成堆積の無遺物層）をバックホウで除去した。そして、6月18～27日にかけてIV層・V層を調査した。27日に調査区の掘削を完了し、完掘状況写真を撮影した。この後、後述するとおり、調査区東側にトレンドを設定して調査を行い、現地での調査を終了した。

調査区東側トレンドの調査 6月25日、排土の取り回しを行うために調査区東側の表土を除去した際、縄文土器が出土した。試掘トレンドを設定して確認したところ、調査区の東約3mの範囲まで遺物包含層が及んでいることが判明した。この範囲は本調査区外であるため、その取扱いについて県地域振興局農林整備部農地振興課と協議し、試掘トレンドを拡張して調査対象に含めることにした。この範囲の調査は6月30日～7月2日にかけて実施した。この際、さらに東側に柱穴列を検出した。確認面はIII層に対比されるが、構築時期は不明である。おそらく近世以降の掘立柱建物跡であろう。

整理の方法 出土遺物は、水洗いした後、註記をした。遺物の註記は、遺跡略号（AU）と調査年度（08）とを組み合わせた「AU08」に統一して通しの遺物番号（個別取り上げ）ないし層序名（層序別取り上げ）を記入した。遺物の記録図（実測図・写真）は調査担当者が作成した。出土遺物は長岡市教育委員会埋蔵文化財整理作業所に、記録写真・記録図など長岡市立科学博物館に、それぞれ保管している。

第1表 本発掘調査全体工程表

	平成19年度			平成20年度									
	～3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
事前協議				■									
準備				■	■								
発掘調査				■	■	■							
基礎整理				■	■	■	■						
分類・観察													
遺物固化													
原稿執筆													
印刷・校正													

第IV章 遺跡の結果

1 遺跡の性格

遺跡は渋海川によって形成された洪積段丘の崖下に位置し、本発掘調査によって14,862点の遺物が出土した。その内訳は縄文時代の遺物12,741点、古代の遺物2点、中世の遺物7点、近世～近代の遺物41点である。縄文時代の遺物が85.7%を占めるが、これに伴う遺構が検出されなかったことから、今回の調査区域は段丘上に展開する新町上の原遺跡の集落外縁、崖線下の捨て場であると推測される。

2 調査区の堆積状況（図版1）

調査区の堆積状況は図版1に示したとおりであった。南側に段丘があるため南から北に向かって傾斜し、その一方で、調査区中央が馬の背状に高くなり、その東と西、とりわけ東側が低くなっている。こうした堆積状況を反映してか、調査区の東側からの遺物出土量が多いという傾向がある。

調査区の堆積は概ね6つの層に細分される。このうちII・IV・V・VI層から遺物が出土しているが、主体となるのはIV層である。以下に概説する。

I層は旧耕作土等の表土層である。既に述べたとおり遺跡本体部分に由来すると推測される縄文時代の遺物を多量に含むが、珠洲旋片や近世陶磁器を少量含む。

II層は黒灰色～暗褐色を呈する土層である。粒径約10～50mmの礫を含む。縄文時代の遺物の他に、中・近世の陶磁器をごく少量含む。

III層は青灰色を呈するシルト層である。細粒砂によって形成される範囲もあるが限定的である。

IV層は灰褐色を呈する土層である。粒径約10～60mmの礫を少量含む。縄文時代中期中葉～後期初頭を主体とする遺物包含層である。礫の含有量が高くなる部分もあり、この範囲についてはIV'層とした。

V層は灰色を呈する砂礫層である。IV層に係る遺構確認面。上層に遺物を少量含む。

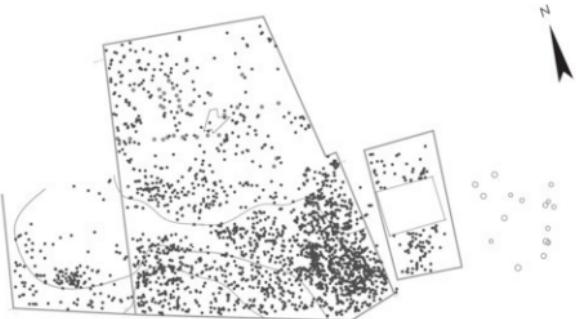
VI層は青灰色から灰色を呈する粘土層である。V層の堆積が良好でない範囲。特に調査区北東側では、上層に遺物が少量含まれる。また、調査区の西側（サブトレーナー）でトチノミなどの植物遺体を検出した。

3 遺構と遺物の分布（図5・6図 図版1～10）

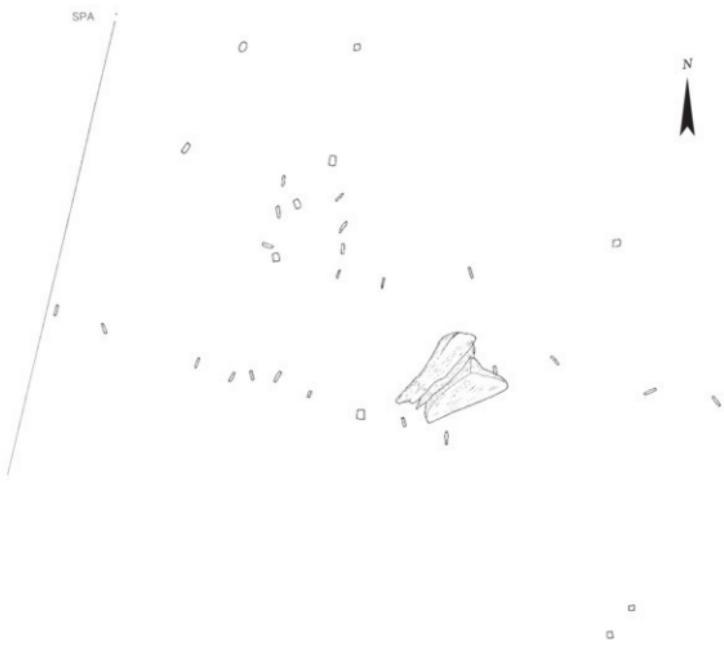
II層 調査区北側で木杭列を検出した（第6図）。杭列を構成する木杭は、ややばらつきがあるものの、幅100mm、厚さ20～30mmの板状を呈するものがほとんどであった。これらに伴う掘り込み等について平面では明確に確認できなかったが、調査区南北セクション（SPA-SPA'）で、断面箱状の掘り込みを確認できた。したがって、木杭列は溝状の施設に伴う土留杭であろう。木杭及び掘り込みがI層に切られていることから、そして現在のは場が整備される以前に構築されたものと判断される。

一方、遺物はII層中から満遍なく出土した。やや西側に偏る傾向が見られるが、II層の堆積については調査区西側の方が良好であったことと関係する。縄文時代の遺物に混じって、15世紀の天目茶碗や近世陶磁器が出土している。これら中・近世の遺物分布は先に述べた木杭列と重なりをみせている。

また、調査区の東に柱痕を伴う土坑群を検出した。確認面はIII層上面であるが、柱痕がI層下位において確認できたこと、柱痕の一つには下端に角鑿によると思われるホゾ穴が残されていたことなどから、近世以降の所産と判断した。



第5図 調査区全体図 (1:200)



第6図 木杭列配置図 (1:50)

IV層～V層　IV・IV'層からは縄文時代の遺物が平面・垂直ともに濃密に出土している。IV'層は縄文中期中葉の遺物が主体となる。V層において、遺物は調査区の東西両側に分布する。これは調査区が馬の背状の地形で、調査区中央におけるV層の堆積が良好でないことを反映している。

また、出土土器をみる限り、IV層とV層に含まれる遺物の時期幅には大きな差異は認められない。

縄文土器の分布　以下では個別上げした資料から時期ごとの分布傾向を概観する（第7図）。

中期前葉　この時期は調査区の東側に偏る傾向が明確である。北陸系土器は中期中葉に含まれるものも出土しているが、これも東偏する傾向がある。

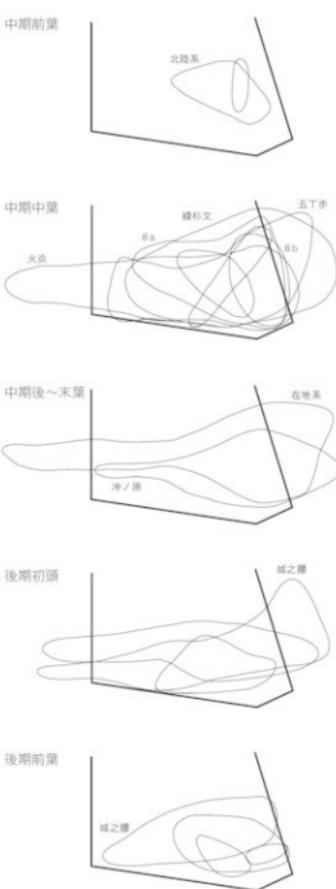
中期中葉　この時期の土器は出土量が多く、調査区全体に分布が広がっている。これを系統ごとに細別してみると、五丁歩遺跡に特徴的な隆帶文を多用する土器群・大木8a式併行の土器群・縁杉文が施される一群のように、やや東寄りの分布傾向をみせるものや、大木8b式併行や在地系土器（縄文+隆沈線）のように、はっきりと東側に偏るものが多い。一方、火炎土器は西側に広がりをもっており、特徴的である。

中期後葉～末葉　この時期の土器は東西に広く散漫な分布をみせる。沖ノ原式土器の分布は調査区東側に広がりをもつ。また、在地系土器（縄文+沈線）の分布は西側も広がりをもち、火炎土器（註1）と類似した分布を示す。

後期初頭　この時期の土器も広く散漫な分布をみせている。城之腰類型には前葉に対比される一群もあるが、こちらの分布も引き続きほぼ同様の分布傾向を示す。

後期前葉　前述した城之腰類型以外の土器は、調査区東側に偏って分布している。

このように、狭小な調査区であるが、土器群ごとに分布の差異を捉えることができた。復元土器をみると、分布が調査区東側に偏る土器群のものは南北方向に、東西に広く分布する土器群、特にやや西側に分布の中心がある土器群は東西方向に、それぞれ接合関係をもっており、明確な差異が示されている（図版5～10）。遺物包含層となるIV層・V層の堆積が調査区東側においてより良好なため、分布の中心が東側に偏るのはある意味で妥当であるが、その一方で調査区西側に分布の中心をもつ一群が存在する。これらのことから、時期ごと、そして土器群ごとに廃棄行動の差異があったことが推察される。



第7図 時期別土器分布図

4 遺物各説 (図版11～30 写真図版5～11)

(1) 調査区出土の遺物

土器 1～11はI層下部から出土した土器である。1～10は縄文土器である。1は火炎土器、2は中期中葉に位置づけられる東北系土器、3・4は綾杉文が施文される土器、5は大木8 b式併行、6は大木10式併行、7は城之腰類型、8は三十稻場式土器、9は南三十稻場式土器である。10は底部資料で、後期の所産であろう。11は珠洲焼の擂鉢片で吉岡編年のIV期に区分されよう。

12～15はII層から出土した土器である。II層出土のものは小破片が多く、図示できるものが少ない。12は中期、13は後期初頭に位置づけられる。14は胴部に条線文が施される土器である。恐らく三十稻場式土器に含まれるであろう。15は南三十稻場式土器である。

16～24はIV層出土の縄文土器である。16・17は大木7 b式に併行する東北系土器である。16はキャリバー形深鉢の口縁部である。17では胴部文様（木目状撫糸文）が高い位置までせり上がっている。

18～29は中期前葉の北陸系土器である。18は内屈する口縁を持つ土器で、その屈曲部にヘラ状工具によるキザミが施される。19～24・26には爪形文がみられる。このうち19～21は胎土・施文工具からみて同一個体である可能性が高いと判断される。22は大波状をもち、千石原遺跡などにその類例を求めることが出来る。27は半截竹管状工具による半隆起線文を施すもので、一方、28・29は半截竹管状工具で口縁と平行する沈線を引く一群である。

30～62は火炎土器である。30～37は口縁部、38～41は胴部上半、42～59は胴部下半、60～62には底部資料をまとめた。31は王冠型土器の半完形資料。環状突起と山形突起を並べ、波頂部から満巻文を懸下させている。この満巻文の横にはさらに満巻文が連続している。突起に挟りを入れず段を設けるなど、やや特異な要素をもつが、胴部の満巻文を含め王冠型土器に一般的なモチーフで構成されている。

63～94は五丁歩遺跡に特徴的な隆帯文を多用する土器群である。7・63はキャリバー形の口縁部であり、恐らく円筒形の胴部を組み合わせた深鉢になると推測される。半隆起線で文様を描き、それによって作出された区画内には刺突文を充填する。刺突文を充填する区画と、充填されない区画とが交互に配置されており、単位文様化しているものと推測される。71・73・74は沈線、72は隆帯、75～79は半隆起線で文様が描かれる一群である。81・82は削り出しによって交互刺突文のような印象の横位文様を作出している。83～85は沈線文と半隆起線が縱方向に施文されているが、84には半隆起線にキザミが確認できる。85は沈線間に押引き状の刺突が施されている。また、91～94については、胎土・焼成等からこの分類の中で古く位置づけられる可能性がある。特に92の胎土には雲母が入っており、他の土器とは大きく異なる。

95～113は大木8 a式に併行する東北系土器群である。95～103はキャリバー形の口縁部～頸部、104～109は概ねバケツ状に開く器形の土器である。111は浅鉢、112は突起である。110と113は文様要素等から、異系統の土器と折衷しつつ、より在地化した土器であると推測される。

114・115は中期中葉の北陸系土器である。114は横位区画に交互刺突文が用いられ、一方、115では爪形文が施される。

116～131は大木8 b式に併行する東北系の土器である。116・117は突起、118～123はキャリバー形の口縁部、124・125は胴部資料である。126・127は外反する波状口縁をもつ土器である。128は口縁部区画の下に満巻きを縱方向に連結した貼付文が配置されている。この貼付文が独立しつつある点や、地文となる隆起線文が縦位に伸びる点などから、柄倉式土器との関連性を窺わせる土器である。129・130では口唇部に無文帶を設け、その下に口縁と平行する矢羽状の押引文を描いている。これら128～129については口縁部

文様帶の差異こそあれ、胸部文様の構成において類似性が認められる。131は眼鏡状突起のバリエーションであろうか。

133～164には綾杉文が施文される土器群をまとめた。132～150は綾杉文が細かく、151～158では太く大きい。そして159～164には、132～150・151～158とさらに様相を異なるものをまとめた。沈線が粗雑になるもの（160・162・163）や、縦位のみの沈線になるもの（161）が含まれる。したがって、この綾杉文が施される一群は大木8 b式の新段階を中心とするものの、やや時間幅をもつと言えよう。

165～181は沖ノ原式土器である。165～168には大木9式的要素が認められるものをまとめた。169～176は万條寺林類型に分類される。このほか、179は口唇部に無文帶を設け、その下に刺突の入る3条の隆帶を口縁と平行させており、また、180は口縁から調整された隆帯が下垂している。182は中期の深鉢形土器である。183～189は城之腰類型である。190～201は多賀屋敷式に分類される。この一群はさらに、口縁部に隆帶文が用いられるもの（190～198）と、波状口縁をもつもの（199～203）とに分けすることが出来る。204・205は簡素な小形の鉢であろう。206～208は大木10式併行の土器であるが、称名寺式土器との関連も窺わせる。209～240は三十稻場式土器である。209～212は城之腰類型、213～225は三十稻場類型である。229～231は胸部に柳葉状工具による条線文が描かれる土器である。232は斜格子文、234は木目状撚糸文が施されている。237・238は蓋形土器、239は注口土器の注口部である。240～242は南三十稻場式土器である。

243～250はV層出土の繩文土器である。244は五丁歩遺跡に特徴的な隆帶を多用する土器群に含まれる。244～248は火炎土器である。249～254は東北系の土器群で、249～251は大木8 a式併行、252は大木8 b式併行、253は大木9式併行に位置づけられる。256は口縁部に環状貼付文が付く加飾隆帯を巡らし、3段の半隆起線を横位区画とする土器で、後期初頭に位置づけられる。257は多賀屋敷式の波状口縁をもつ一群である。258は城之腰類型に分類される。259は南三十稻場式土器である。口唇に刺突が連続する。

260～278はVI層出土の繩文土器である。260は大木8 a式併行の東北系土器、261・262は火焰形土器である。263は五丁歩遺跡に特徴的な隆帶を多用する土器群に含まれる。267～272は大木8 b式～9式の段階に位置づけられるもの。267は口唇部の形態がことなるものの、施文手法は129・130と類似しており、柄倉式土器との関連を窺わせる。また、272は細かい綾杉文が施される土器で、剣先文が貼付される。273～278は後期の土器である。276・277は城之腰類型である。278は施文の手法が161に似るもの、胎土等から判断してこの時期に入れておきたい。

石器 279～289はII層出土の石器である。279は石鎌である。基部はやや膨らむ。実測図正面左側縁はゆるく内彎し、同右側縁は外彎する。280は三脚石器である。脚部が一つ欠けている。破断面が確認できないことから、リダクションが施されていると推察される。281～285は板状石器である。283は比較的厚みのある素材を用いた小形の板状石器で、断面形が台形状で三角形、また平面は抉入三角形であり、個性的な形態を呈している。284は平面が三角形を、285は不定形な抉入三角形を呈している。286は不定形石器である。厚手の調整剥片の縁辺に連続する抉りを入れている。287～289は石錘である。いずれも扁平穂の両端を打ち欠いて糸掛けを作る、いわゆる穂石錘である。今回の出土した石錘は全て穂石錘であった。

290～334はIV層出土の石器である。290は石鎌である。平基で、直線的な側縁をもつ。291は石槍である。柳葉状の形態を呈する。未成品であろう。292～294は三脚石器である。292は典型的な形態である。一方、293は側縁部を中心に両面調整が施されるものの、裏面が内彎しない。さらに294では全体の形態は板状石器とほとんど差がない。しかし、実測図下側の側縁が明確な意図をもった両面調整によって作出されている点を重視して三脚石器に分類する。295～299は板状石器である。いずれも扁平穂を素材とし、表裏に

縁面を残している。平面形をみると、295～298は円形、299は側縁に連続する抉りが入っている。298では部分的に実測図正面から裏面への剥離によって縁辺が作出されており、使用過程において石器の表裏が転換した可能性がある。板状石器は通常同一方向からの剥離によって縁辺が作出されていることから、興味深い一例となろう。300～315は打製石斧である。このうち312～314は刃部が未加工の一群である。また、310・311についてはリダクションを受けており、この一群に含まれるものだろう。315は笠状石器に分類され得る資料で、刃部に光沢を伴う摩滅痕が確認される。光沢を伴う摩滅痕は300・301・302・304・305・309・310にも確認されている。316～323は不定形石器である。318・320は剥片の内唇する縁辺に連続する二次加工を施している。323では、調整剥片の縁辺に微細剥離痕が確認できる。324は楔形石器である。325・326は石核、327は石錐である。328・329は台石、330～332は石皿である。370は使用面が弓状に深くくぼむ。331も370と同様使用面が弓状にくぼむが、裏面も敲打によってくぼみが作られている。また、破断面に直径約15mmの穿孔が確認できるが、これが何を意味するのかは不明である。332は使用面のくぼみが浅く、やや平坦である。333は磨石で、3箇所のごく浅い凹痕がある。334は両端部が欠損しており全容は明らかではないが石棒に分類した。

335～341はV層出土の石器である。335は板状石器である。平面は三角形である。裏面に主要剥離面が残されており、やや反っている。使用が進み度数の刃部再生が施されていると推測されるが、295とは逆に側縁部調整が片面に限定されている。336は打製石斧である。実測図正面側の刃部に縁面を残している。また側縁部は潰れている。337は定角式の磨製石斧である。338は石錐である。両極打法によって製作されている。339は凹石である。凹痕が三箇所確認できる。340は敲石（ハンマー）である。

(2) 調査区東側トレンチ出土の遺物

土器 341～365は調査方法により出土層位を分離できないものをまとめた。341～344は火炎土器である。341は王冠型土器の突起である。345～349は大木8a式併行、350～356は大木8b式併行の土器である。357・358は沖ノ原式土器の口縁部。359・360は城之腰類型の深鉢の口縁部～胴部上半の資料。361～365は三十稻場式土器に含まれる土器である。365は蓋形土器である。

366～381はIV層出土の土器である。366は大木8a式併行の土器である。367～369は大木8a式～8b式の段階に位置づけられる。367・368は非常に厚い土器であり、他と一線を画している。370～374は綾杉文が施される土器である。372は地文が繩文となり区別される。375は信州系の圧痕隆帯文土器に分類する。376は多賀屋敷式の、口縁部に刺突のある環状貼付文が配置される深鉢である。377は城之腰類型に分類されよう。378～381には後期の深鉢をまとめた。378～380では口唇部に無文帯を設け、その区画として、378・379は繩の側面圧痕文を、380は2条の刺突列を施している。381は波状口縁をもつ土器である。

382～390はV層出土の土器である。382は中期前葉の北陸系土器、383は五丁歩遺跡に特徴的な土器群に含まれる。385は細片であるが隆帯を挟んで沈線と柳歛状工具による条線文を配置するというモチーフが375との類似性を窺わせる。386は城之腰類型。387～390は深鉢の胴部資料である。

391～399はVI層出土の土器である。391は火炎土器の底部。394は隆帯を調整する手法から大木9式併行に位置づけられよう。395は沖ノ原式土器に含まれるもの、396・397は多賀屋敷式。397は波状口縁をもち、頸部区画には沈線が施される。399は三十稻場式の蓋形土器である。

石器 400は打製石斧である。両側縁にのみ二次加工が施されている。先端部は縦面（表面）と主要剥離面（裏面）で構成されるシャープな縁辺である。

第2表 繩文土器土器観察表（主要なもの）

団体	出土層位	器種	時期	系統			文様の特徴	胎土	色調	備考	
				類型・土器	口径	底径					
11-16	IV	深鉢	中期前葉	東北系			口縁にC字状の突起とともに肩部の小突起が認められ、内両の部分には溝文RLの範囲止めで横長多角形円文が描く。その下部には溝文RLの横回転文とその後深めの沈縫で「X」状のモチーフ等が描く。	灰白 白色 黑色	白色 黑色 (10YR7/1)		
11-18	IV	深鉢	中期前葉	北陸系			口縁端部に舌状の突起。口縁から側部にかけて平敷き管状工具による平行沈縫文。筒口、LH溝文構成を施す。	白色 黑色 灰色	透明 (10YR7/3)	に若い黃褐色 個体4	
12-31	IV	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	在地系 玉冠型	(24.5)		山形状突起は覆伏部ならびに底部からなる。口縁部は隣接・接離する圓形渦巻き文と縦のV字形の文を描く。斜状突起も認められる。側部は主に渦巻き文を中心として描かれる。	白色 黑色 雪白	透明 上部端片	淡黃褐色 (10YR8/4)	
13-60	IV	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	在地系 五丁歩	(17.2)		口縁直下には覆伏部付又、水平平行線文などが施され、その下部は弧状管状工具を中心として描かれる。弧状管状文によって分かれると月状の複数箇所に横回転文によって区画する。	白色 黑色 白色	透明 上部端片	褐色 (SYR6/6)	
15-110	IV	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	在地系			大きな山形突起が付口縁は波打を見る。この波打に沿って口縁直下に平敷き管状工具によより平行沈縫文4条が認められ、そのうちの中央2条は上部に斜列斜縫文と連続して施される。底部は同様の平行沈縫が水平に引かれる。	白色 黑色	土器 端片	に若い燒 (SYR7/4)	
15-128	IV	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	在地系 鏡形文	(17.7)		口縁部に沈縫で横長多角形文の区画で描きその中央を斜方斜縫や口縁する。側部上半には斜載竹管状工具によるV字形沈縫文。下半には斜載沈縫が認められる。また側部の中央には上下に連結した複数管状工具が附着される。	白色 黑色 白色	透明 (7・8 SYR6 /4)	に若い燒 (7・8 SYR6 /4)	
16-145	IV	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	在地系 鏡形文			縦方向に連結するワツビ手状陥没縫文を描く。沈縫によっても縦方向のワツビ手元、逆T支なども描き、その間を開く斜羽根状沈縫文で構める。	雪白 黑色 白色	透明 (10YR7/2)	に若い黃褐色 個体5	
16-135	IV	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	在地系 鏡形文	(14.5)		中空の突起は渦巻文。側文などによって解られる。口縁部には横長い区画が並んで内部を縦の短い沈縫が充填される。側部にも斜渦巻文、側先の斜陥没縫で構かれ。側面を覆う斜沈縫が認めている。	白色 黑色 白色	透明 黑色 (7・8 SYR8 /4)	淡黃褐色 個体6	
17-169	IV	深鉢	中期末葉	沖ノ原式 万条寺形態型	(12.0)		口縁端部に小突起があり、口縁部には溝文RLの斜方斜縫が認められ、その下に1条の加施斜縫がある。斜溝文には沈縫で「乙」字形文が認められる。また斜陥没手の残骸が認められる	黑色 白色 透明	灰白 (10YR8/2)		
18-183	IV	深鉢	後期初頭	在地系 城之堀型態型	(25.0)	10.6	37.0	瓶部に1条の加施斜縫を認めし、側部には網文RLの模認文を施す。加施斜縫は全通せず端部で「ノ」状に齊反する。	白色 黑色 白色	透明 上部端片 (10YR8/2)	灰白 個体1
18-184 ~186	IV	深鉢	後期初頭	在地系 城之堀型態型			口縁部には2条の斜渦巻文と斜帶を認めぐ。側部には網文RLの横回転文が施される。斜帶の一部は横長円形の駆出文となる。	白色 黑色 白色	透明 上部端片 (10YR8/2)	灰白 個体7	
20-252	V	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	在地系			口縁部に水平の平行沈縫文と斜帶を認めぐ。沈縫文は斜載竹管状工具を用いたものであり、斜帶部は斜く無い側面が加えられている。側部には斜載斜縫が認められる。	白色 黑色 白色	透明 上部端片 (10YR8/3)	淡黃褐色 個体8	
21-256	V	深鉢	中期末～ 後期初頭	在地系	(45.0)		6部位の小突起口縁をなし、その直下に水平の加施斜縫を認めぐ。一部は斜載斜縫付文となる。瓶部を主無文とし、その下端を下条の手筋竹管状工具による平行沈縫で区画する。側部は網文RLによる横回転文が認められる。	白色 黑色 白色	透明 上部端片 (10YR8/3)	淡黃褐色 個体9	
20-375	IV	深鉢	中期中葉 (大木Rb 式平行)	压痕渦巻文系			下垂する2条の斜渦巻文と二者を横す斜帶がみられる。この斜帶の両外に横長斜工具による水平の多条沈縫文と、太い連続部斜沈縫文が描かれる。	白色 黑色 白色	透明 上部端片 (10YR8/3)	淡黃褐色 調査区分 東シランチ	

第3表 石器観察表

調査	記号	層	器種	分類	石材	最大長	最大幅	厚さ	重さ	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
22-279	357	II	石劍		チート	(1.5)	(1.2)	0.3	0.5	
22-280	445	IV	二脚石器		頁岩	4.2	(3.7)	1.0	10.1	
22-281	327	II	板状石器		頁岩	4.4	4.2	1.2	22.5	
22-282	3	II	板状石器		頁岩	4.3	5.3	3.1	42.5	
22-283	114	II	板状石器?		頁岩	3.2	3.7	1.8	12.9	
22-284	363	II	板状石器		流紋岩	6.0	5.7	0.8	27.7	
22-285	158	II	板状石器		頁岩	5.8	5.4	1.1	34.4	一部に摩滅痕?
22-286	360	II	不定形石器		頁岩	5.0	5.4	1.8	43.1	調整打面
22-287	66	II	石錐		安山岩	6.6	2.6	1.3	11.4	
22-288	223	II	石錐		不明	5.3	3.8	1.0	25.3	
22-289	209	II	石錐		安山岩	(6.5)	6.2	1.7	79.2	下端部破損
22-290	643	IV	石劍		チート	1.5	(1.0)	0.2	0.3	
22-291	1742	IV	石劍		ガラス質安山岩	(9.5)	4.1	2.0	69.1	先端部欠損
22-292	1337	IV	三脚石器		社質頁岩	5.5	6.4	1.2	32.1	
22-293	967	IV	二脚石器		流紋岩	(4.9)	6.9	2.1	46.0	
22-294	1136	IV	二脚石器		流紋岩	6.6	6.6	1.7	80.6	
23-295	613	IV	板状石器		流紋岩	8.1	9.6	0.9	89.8	
23-296	588	IV	板状石器		頁岩	4.2	4.6	0.8	89.8	
23-297	345	IV	板状石器		頁岩	6.8	8.0	2.4	130.3	
23-298	965	IV	板状石器		頁岩	6.6	7.1	0.9	52.9	
23-299	—	IV	板状石器		流紋岩	4.7	5.9	1.0	30.1	通称するノチを作出する形態
23-300	508	IV	打製石斧		頁岩?	11.4	6.5	1.6	115.4	右側下部に光沢を作り摩滅痕あり
23-301	442	IV	打製石斧		頁岩	12.3	5.7	2.6	145.9	下端部を中心に光沢を作り摩滅痕あり
23-302	1611	IV	打製石斧		頁岩	11.1	6.5	3.0	143.1	下端部に光沢を作り摩滅痕あり
24-303	1564	IV	打製石斧		頁岩	13.8	5.3	2.3	170.4	表面に縦面を残す一端材
24-304	1538	IV	打製石斧		社質頁岩	11.9	4.6	2.3	122.5	右側下部に光沢を作り摩滅痕あり
24-305	1542	IV	打製石斧		頁岩	11.2	4.7	3.0	149.0	光沢を作り摩滅痕あり
24-306	1538	IV	打製石斧		頁岩	12.1	5.2	2.6	163.4	基部端に縦面を残す
24-307	1235	IV	打製石斧		黑色頁岩	15.1	6.2	2.1	185.3	
24-308	1234	IV	打製石斧		頁岩?	13.2	5.4	1.3	86.3	
25-309	1679	IV	打製石斧		頁岩	9.6	5.9	1.2	99.3	右側下部を中心で光沢を作り摩滅痕あり
25-310	1440	IV ⁺	打製石斧		安山岩	13.1	5.1	2.0	161.5	両側端に光沢を作り摩滅痕あり
25-311	1512	IV	打製石斧		黑色頁岩	10.4	5.1	2.2	121.2	細削り跡
25-312	10024	IV	打製石斧		頁岩	6.3	3.8	0.8	16.6	表面に縦・裏面に上要剖離面
25-313	835	IV	打製石斧		頁岩	9.9	4.8	0.8	40.4	表面に縦・裏面に上要剖離面
25-314	1360	IV	打製石斧		頁岩	11.9	3.4	0.9	62.4	表面に縦・裏面に上要剖離面
25-315	916	IV	板状石器		頁岩	11.1	3.9	2.1	89.2	下端部を中心に光沢を作り摩滅痕あり
25-316	919	IV	不定形石器		安山岩?	(9.7)	4.2	3.3	125.3	
26-317	1296	IV	不定形石器		頁岩	9.2	10.4	1.9	223.7	縫隙
26-318	623	IV	剝片類	次加工のあら剥片	頁岩	7.3	6.3	0.8	42.0	ノチ状に内溝する縫隙に二次加工
26-319	640	IV	不定形石器		頁岩	6.5	7.4	1.3	62.9	縫隙打面
26-320	364	IV	剝片類	次加工のあら剥片	頁岩	7.0	5.5	0.6	29.2	ノチ状に内溝する縫隙を中心に二次加工
26-322	327	IV	不定形石器		頁岩	8.7	7.8	2.0	43.6	縫隙打面
26-323	1331	IV	剝片	使用歴のある剝片	頁岩	4.5	6.7	1.6	33.2	平坦打面 調整剝片の縁辺を使用
26-324	1534	IV	ビセラ?		ガラス質安山岩	3.9	8.3	1.6	49.8	
27-325	1777	IV	石核		ガラス質安山岩	6.4	8.0	4.8	224.7	
27-326	1290	IV	石核		頁岩	7.5	7.7	4.0	212.5	
27-327	582	IV	石錐		安山岩	5.9	4.1	1.1	19.7	
27-328	1668	IV	石錐		安山岩	14.8	13.2	2.6	723.2	
27-329	1837	IV	石		安山岩	(14.8)	(18.7)	(5.8)	247.0	表面仕化 裏面に凹痕
29-330	1841	IV	石器		安山岩	(16.0)	(26.8)	(10.4)	340.0	重量はヘルスマーテーで計測
28-331	951	IV	石核		安山岩	(12.0)	(17.0)	(6.0)	859.7	進行率1/2 分孔?
28-332	1031	IV	石錐		安山岩	(10.2)	(20.0)	(4.3)	1221.0	進行率1/3～1/4
28-334	988	IV	石錐		不明	(10.1)	(6.3)	(3.7)	200.1	両端部欠損
28-334	1133	IV	剝片類	剝・回	頁岩	10.4	10.4	5.7	867.5	
28-335	—	V	板状石器		頁岩	4.9	5.7	1.6	35.4	
28-336	887	V	打製石斧		頁岩	(6.5)	5.8	3.8	118.3	
28-337	1689	V	崩壊石斧		板狀岩	(4.5)	3.9	1.4	40.1	基部欠損
28-338	769	V	石核		頁岩	6.7	4.6	2.5	76.3	
28-339	786	V	剥離石類	回・崩	頁岩	8.3	7.3	3.7	350.8	
28-340	661	V	ノンソリ		安山岩	14.8	4.4	2.4	218.1	
28-340	10052	—	打製石斧		頁岩	8.9	6.5	1.3	62.5	表面に縦・裏面に上要剖離面

第V章　まとめ

新町上の原遺跡は、渋海川を望む河岸段丘上に形成された集落跡であるが、昭和30年ごろの小国診療所駐車場建設に伴う整地作業の際に大量の遺物が出土したと言われており、したがって大きく削平を受けたものと推測される。

今回実施した本発掘調査は、その崖線下に形成された捨て場を対象としたもので、第IV章で触れたように、160mあまりの調査区から約15,000点（コンテナ換算50箱）の遺物が出土した。出土遺物のほとんどが縄文時代の遺物であり、そのうちの約8割を縄文土器が占め、残りの2割弱が石器である。この他の遺物では、小泊窯産須恵器（环蓋の転用硯）、中世の天目茶碗片や珠洲焼片が出土している。

出土した縄文土器は、中期前葉～後期前葉（大木7b式併行～南三十稻場式）という時期幅をもち、火炎土器をはじめとする中期中葉の土器群が主体となる。新町上の原遺跡は調査のたびに遺跡的印象、特に時間的位置づけが変化する遺跡である。昭和48年（1973）に作成された遺跡カードでも縄文時代後期の遺跡とされており、また、試掘調査前に実見した地元住民の所有する表採遺物については沖ノ原式～三十稻場式土器が目立つという印象があった。また、試掘調査による出土資料については、今回の本発掘調査とは時期幅は同じであるものの、中期後葉～後期前葉の土器が主体であった。今回に調査では後期前葉の土器群、特に南三十稻場式土器の出土が少なく、これまでと状況を異にする。このような現象は、第IV章でも述べたとおり、土器群によってその廃棄行動に差異があり、特に今回調査したような捨て場についてはその傾向が強い、ということを示唆している。

また、調査面積の狭小さゆえに全容を把握するには至らなかったが、出土土器を細かく観察すると、魚沼や上越、その先の信州との関係を示唆する資料が一定量含まれていることに気づく。したがって、岩野原遺跡や馬高遺跡などの信濃川中流域の遺跡と比較して、共通しつつも地域偏差があるという評価を与えることができよう。特に上越地域との関係については、信州系からの影響経路を含め、検討に資するものを提示することができたと思われる。

石器においては、定型的なものでは、三脚石器と板状石器、そして打製石斧が充実している。すでに指摘されているように石器組成は、集落内や捨て場など、廃棄される場所により内容を変える傾向があるため、単純な比較はできないが、魚沼地域（魚野川流域を含む信濃川上流域）に近い様相を示すといえよう。前者については清水上遺跡における検討・整理[高橋 1990]を踏まえたが、やはり分類が困難な中間的形態をもつものが少なからず存在したため、今回の報告では、側縁部調整を重視した。そして、側縁部調整が両面調整になるものは三脚石器、片面調整になるものは板状石器とした。これは、(1)典型的な板状石器において側縁部のリダクションを重ねても片面調整を保持し続けることが看取される点、(2)三脚石器においては側縁部に対するリダクションの進行によって、結果、裏面の抉りが大きくなるという要素も指摘できる点、(3)両面調整による刃部と片面調整による刃部では対象物への“アタリ”が異なる点、以上3点から、側縁部調整（片面／両面）の選択性が、この2機種を規定していると推測されたためである。

そして、打製石斧については、出土した37点中8点に光沢を伴う摩滅痕、1点に擦痕が確認された。これらは刃部に偏在する傾向が高く、使用痕とみなすことができよう。また、今回報告することができなかつたが、チャート製の剥片が多数出土しており、これを含め中期中葉的な石器組成を構成している。

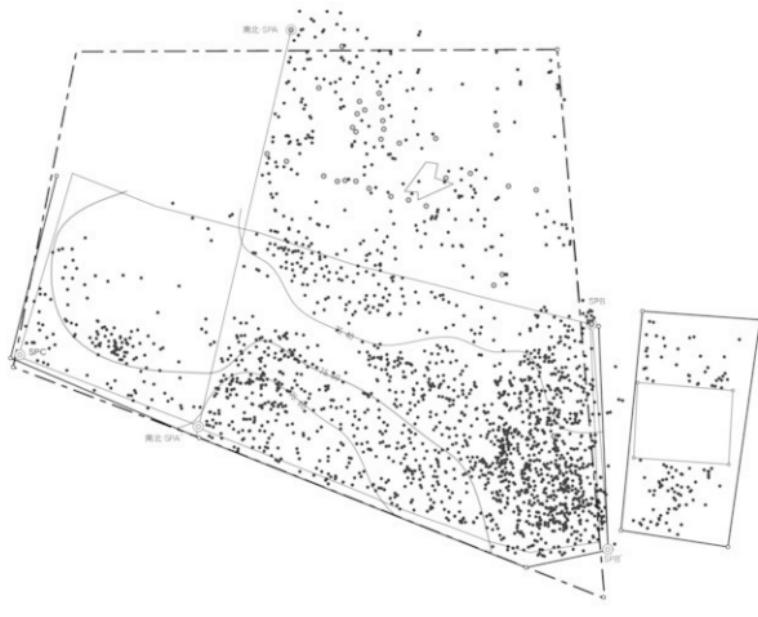
渋海川沿いに目を向けると、岩野原遺跡以南の縄文時代中期～後期の集落遺跡としては、旧越路町域の

成台遺跡（中期）・小坂遺跡（中期～後期前葉）、旧小国町域では国沢遺跡（後期）・法坂遺跡（中期～後期）・郷戸山遺跡（中期～後期）などが挙げられる。しかし、いずれの遺跡でも本格的な発掘調査が実施されておらず、この時期における地域の様相は明らかになっていない。この点で、新町上の原遺跡で実施した本発掘調査の意義は大きい。比較的大規模な集落跡の捨て場、しかもその限定された範囲を対象としているため、集落の全体像を射程するような資料操作や分析は行わなかつたが、今回提示した資料は、地域的様相を検討する上で欠くことのできない資料群となるであろう。今後は表探遺物の資料化を進めることにより、発掘調査資料を補完していくことを課題とした。

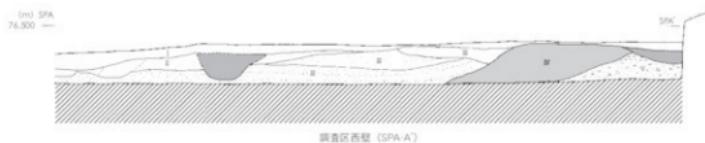
（註1）今回の報告では、火焔型土器や王冠型土器を含めた、これら土器群の総称として、寺崎〔2008〕にならい、「火炎土器」という呼称を用いることとする。

参考文献

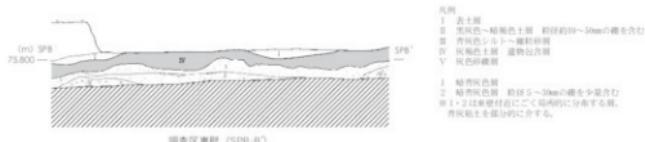
- 阿部昭典 2008 「沖ノ原式土器」 小林達雄編『總覽 縄文土器』 アム・プロモーション。472-479頁
- 池田淳子 2006 「10 上段遺跡」『平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会。28-30頁
- 石坂圭介 2007 「新潟県中越地方の縄文中期末から後期前葉の土器様相」『第20回縄文セミナー 縄文中期終末から後期前葉の再検討』縄文セミナーの会。213-270頁
- 石坂圭介 2008 「三十福場式土器」 小林達雄編『總覽 縄文土器』 アム・プロモーション。618-625頁
- 小国町史編集委員会 1976 『小国町史』本文編 牧野功平（小国町）
- 倉石広太 2006 「馬高式期の石器」『津南学叢書第4輯 縄文土器の時代—その文化を探る—』津南町教育委員会。66-67頁
- 越路町教育委員会 1993 『越路町文化財調査報告書第13輯 多賀屋敷遺跡—第二次発掘調査報告書—』
- 高橋保雄 1990 「三脚石器・板状石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 関越自動車道関連発掘調査報告書 清水上遺跡』新潟県教育委員会。180-189頁
- 寺崎裕助 2008 「火炎土器」 小林達雄編『總覽 縄文土器』 アム・プロモーション。458-458頁
- 津南町教育委員会 2005 『津南町文化財調査報告書第47輯 道尻子遺跡—一宮農地再編整備事業に伴う発掘調査報告書—』
- 長岡市教育委員会 1981 『埋蔵文化財調査報告書 岩野原遺跡』
- 新潟県教育委員会 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩道跡・十二木遺跡』
- 新潟県教育委員会・㈱新潟県埋蔵文化財調査事業団 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 関越自動車道脇之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡II』
- 新潟県教育委員会・㈱新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第130集 上信越自動車道関係発掘調査報告書XII 前原遺跡・丸山遺跡』
- 新田康則 2007 「13 中里北地区試掘調査」『平成18年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会。24-25頁
- 新田康則 2008 「18 中里北地区確認調査」『平成19年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会。24-25頁
- 新田康則 2008 「19 中里北地区試掘調査」『平成19年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会。26-29頁
- 野口寛人・大熊孝 2004 「淡海川における漁獲物の分布及びその特性に関する研究」『第22回土木学会関東支部新潟会研究調査発表会論文集』 土木学会関東支部新潟会。47-50頁
- 柳恒雄 1998 「淡海川の蛇行と漁獲」『越路町史』資料編1原始・古代・中世 越路町。16-17頁



遺跡全体図 (1 : 120)

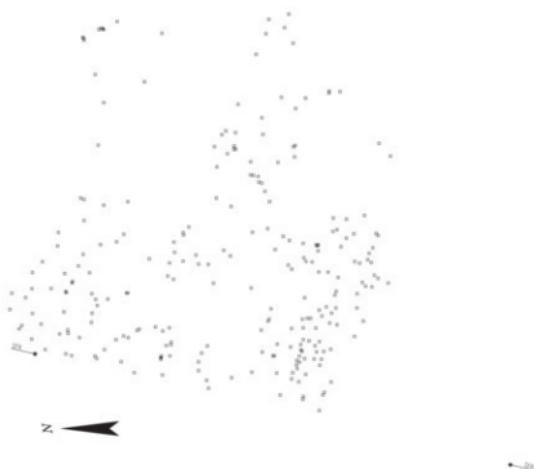


调查区西壁 (SPA-A)



調査区東型 (SPB-B)

土層断面図(1:80)



10m

X

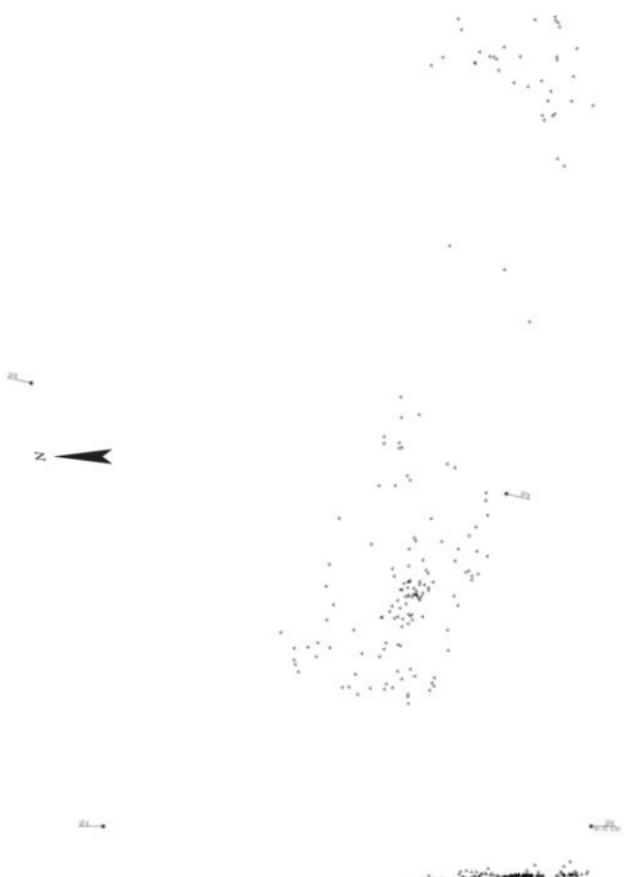
Y

10m

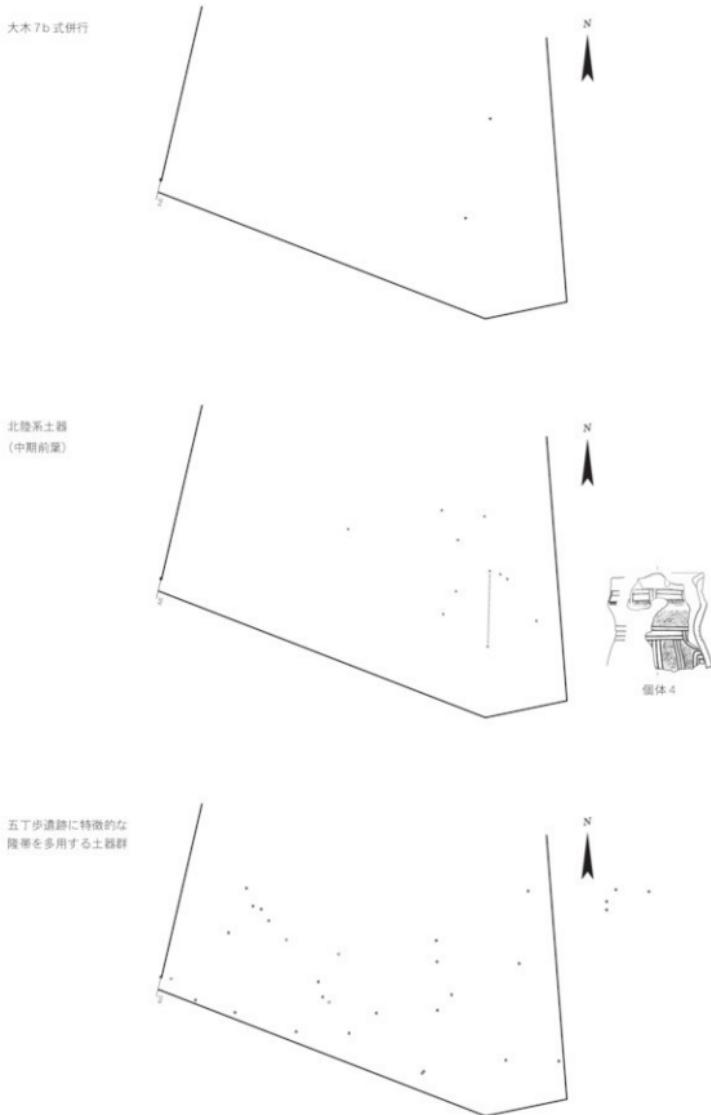
(1 : 100)

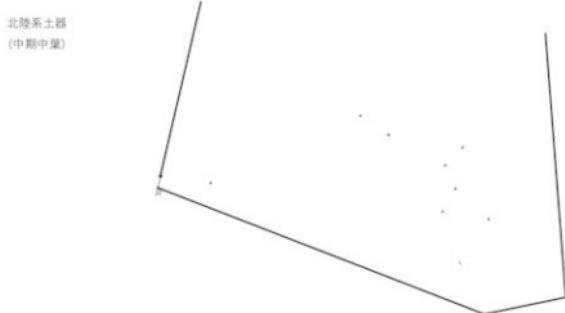
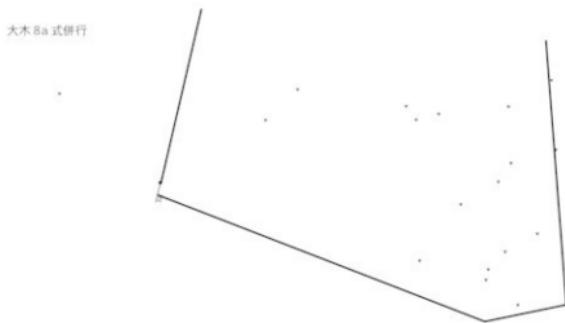
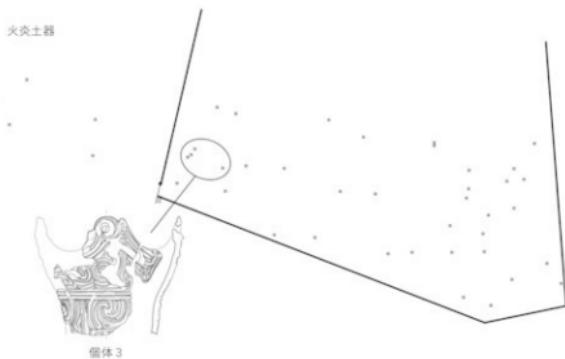


(1 : 100)

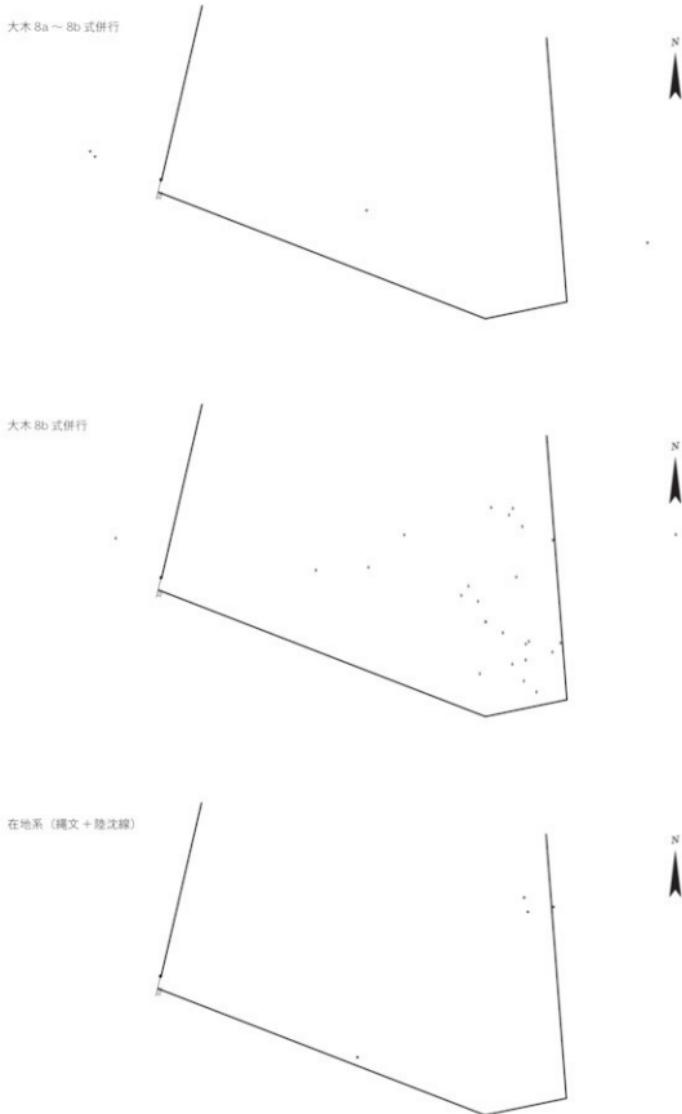


(1 : 100)

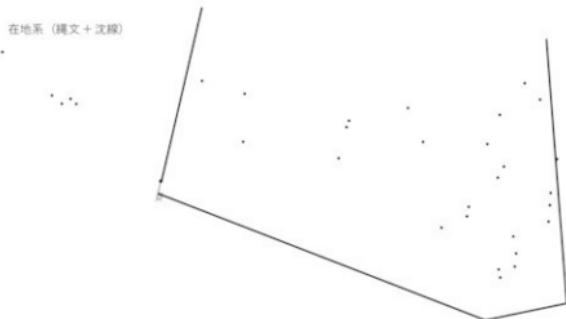
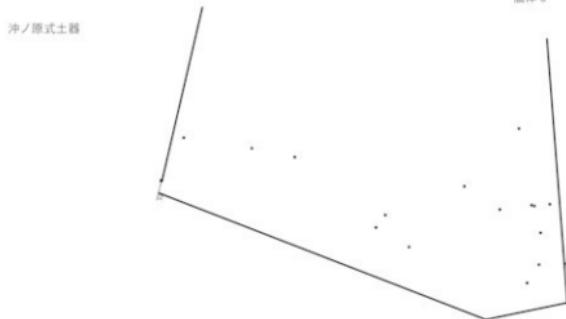
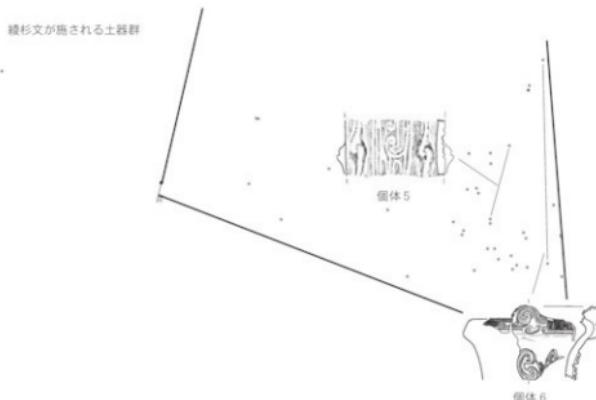


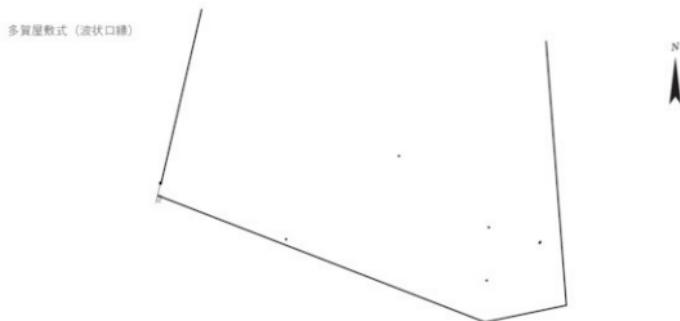
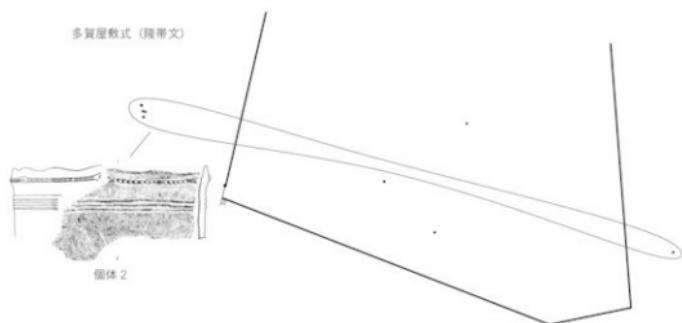
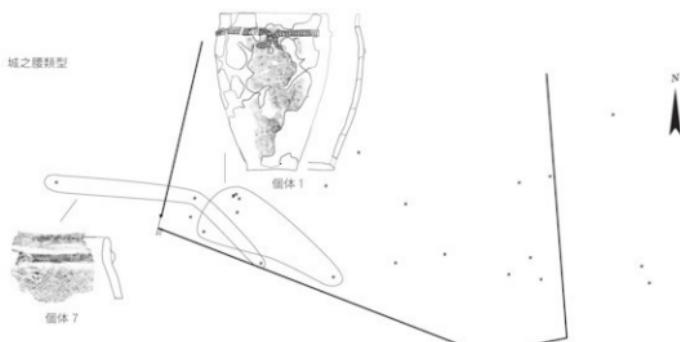


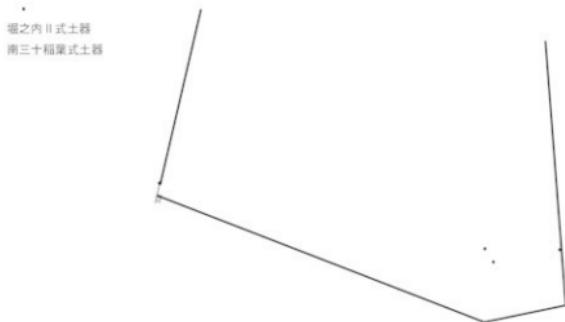
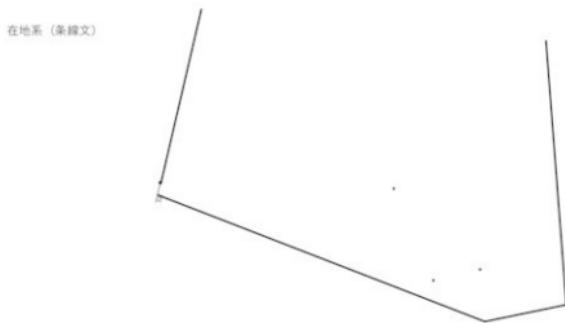
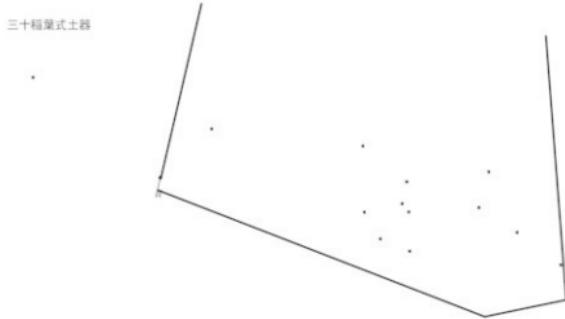
(1 : 120)

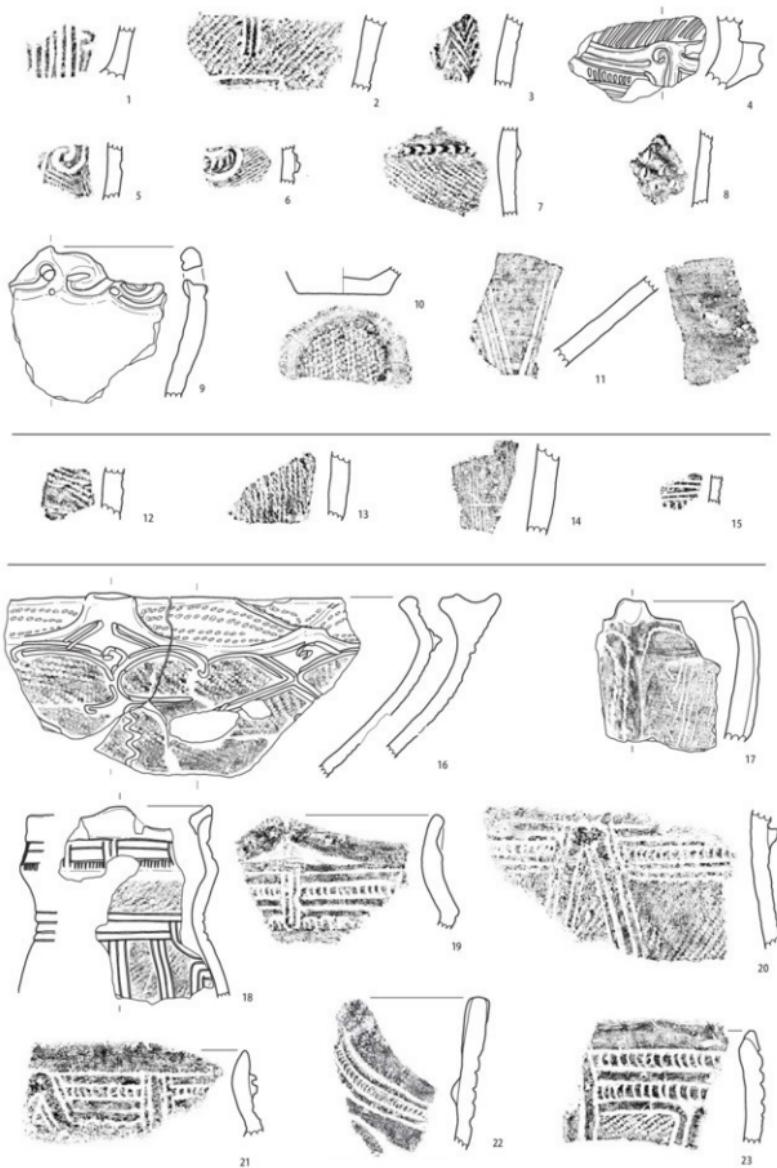


(1 : 120)

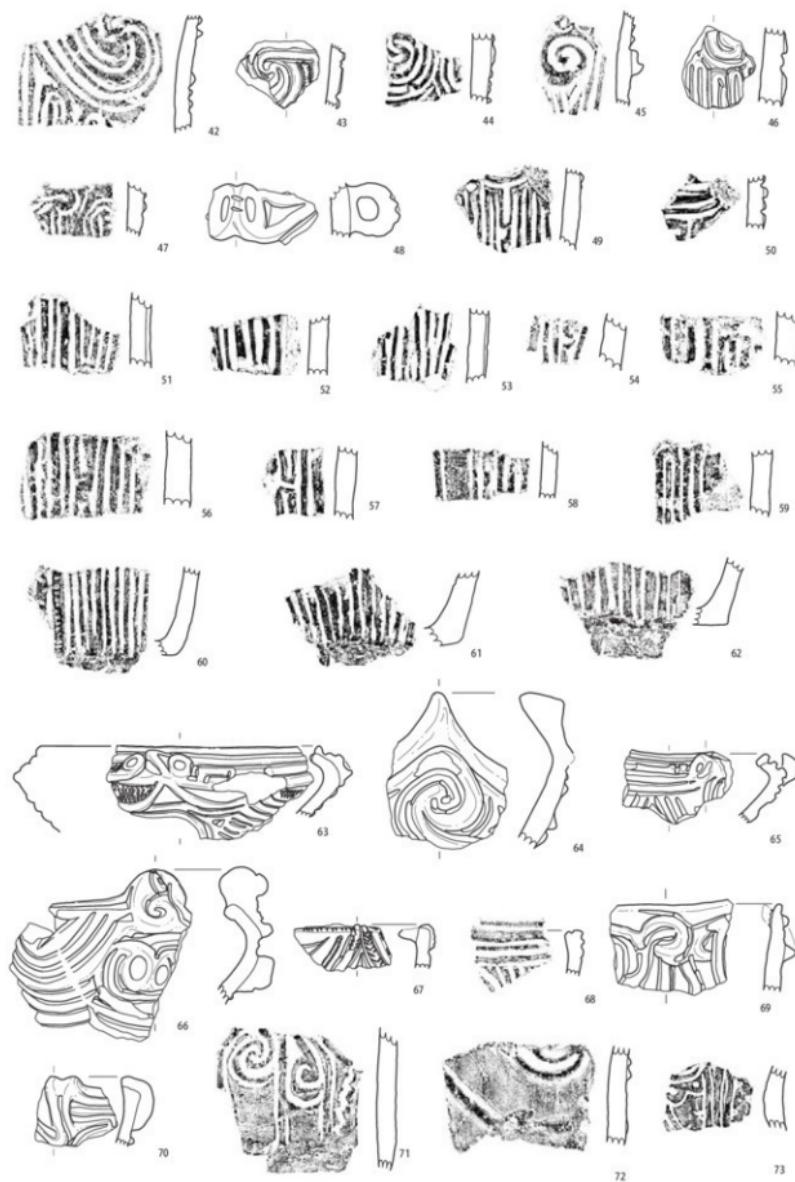








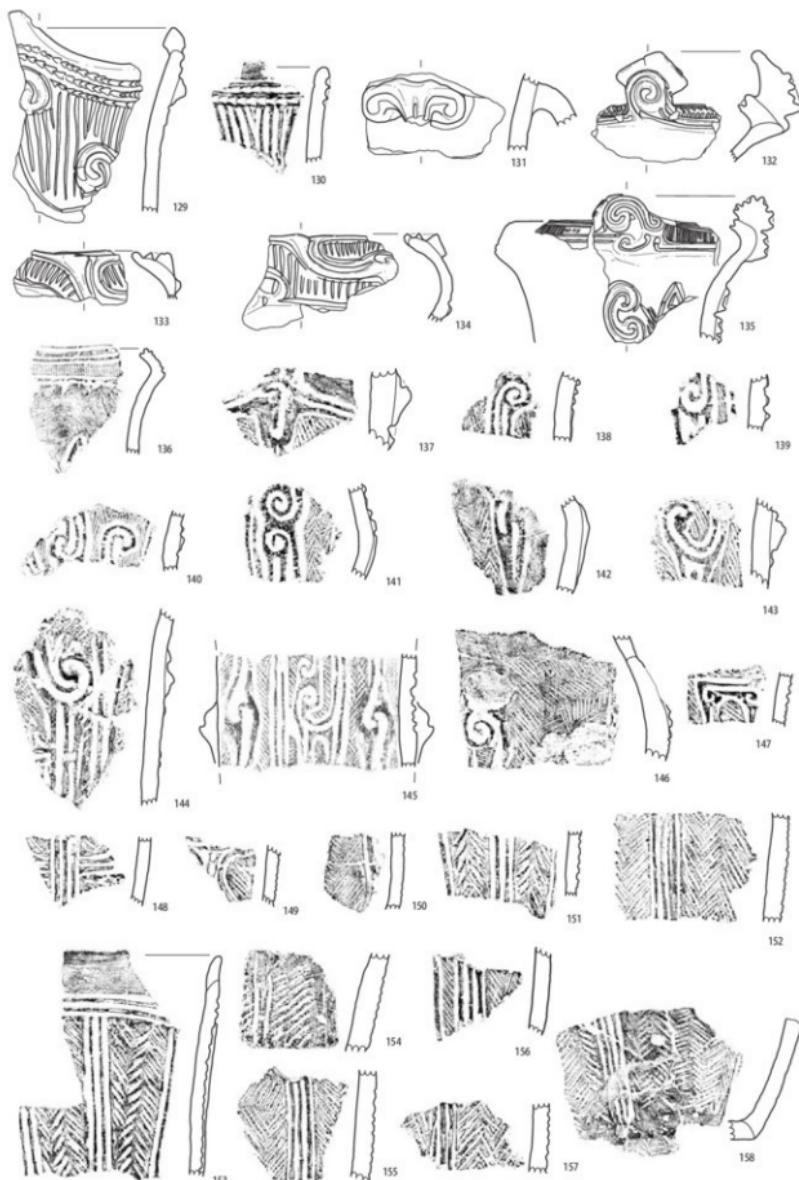


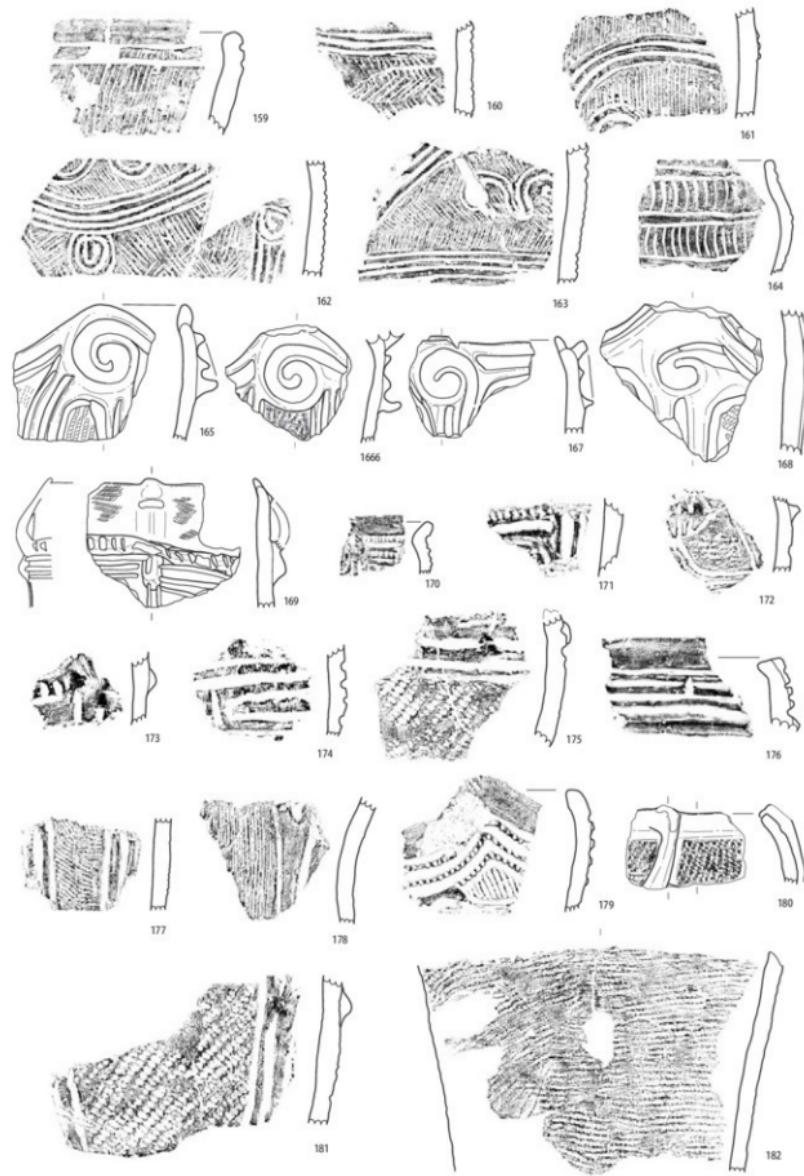


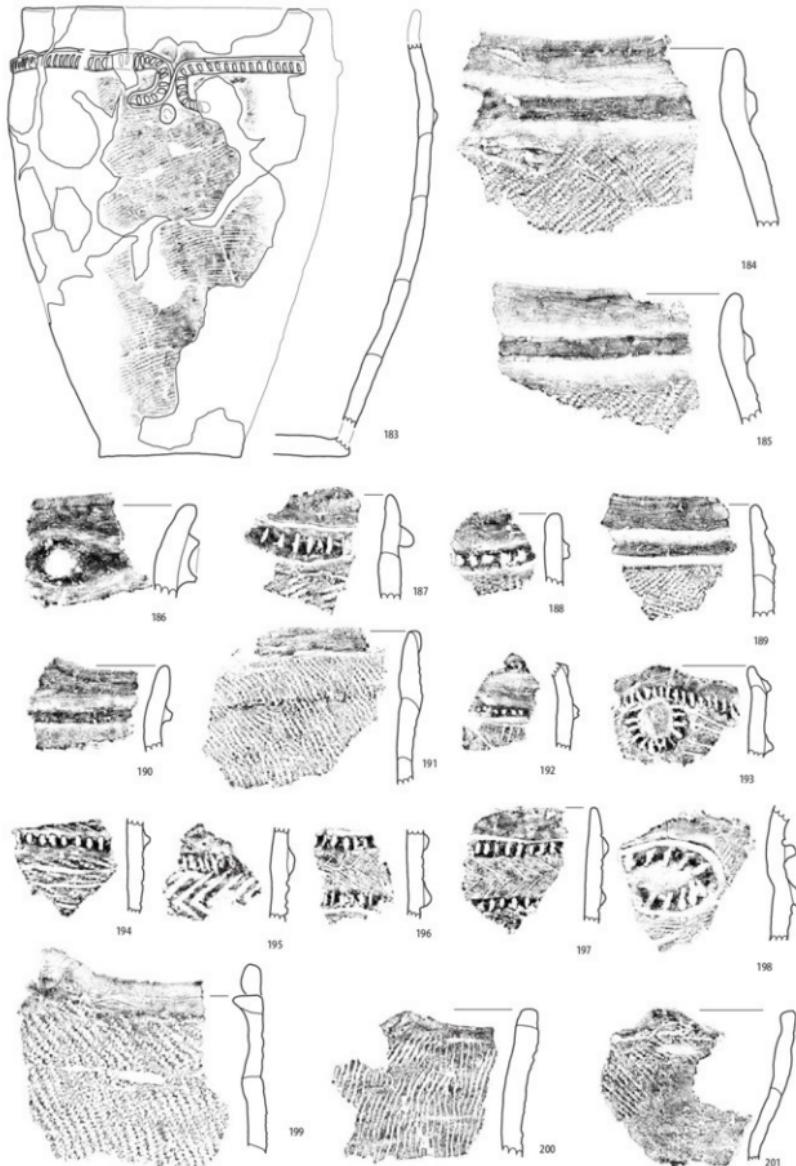
(1 : 3)



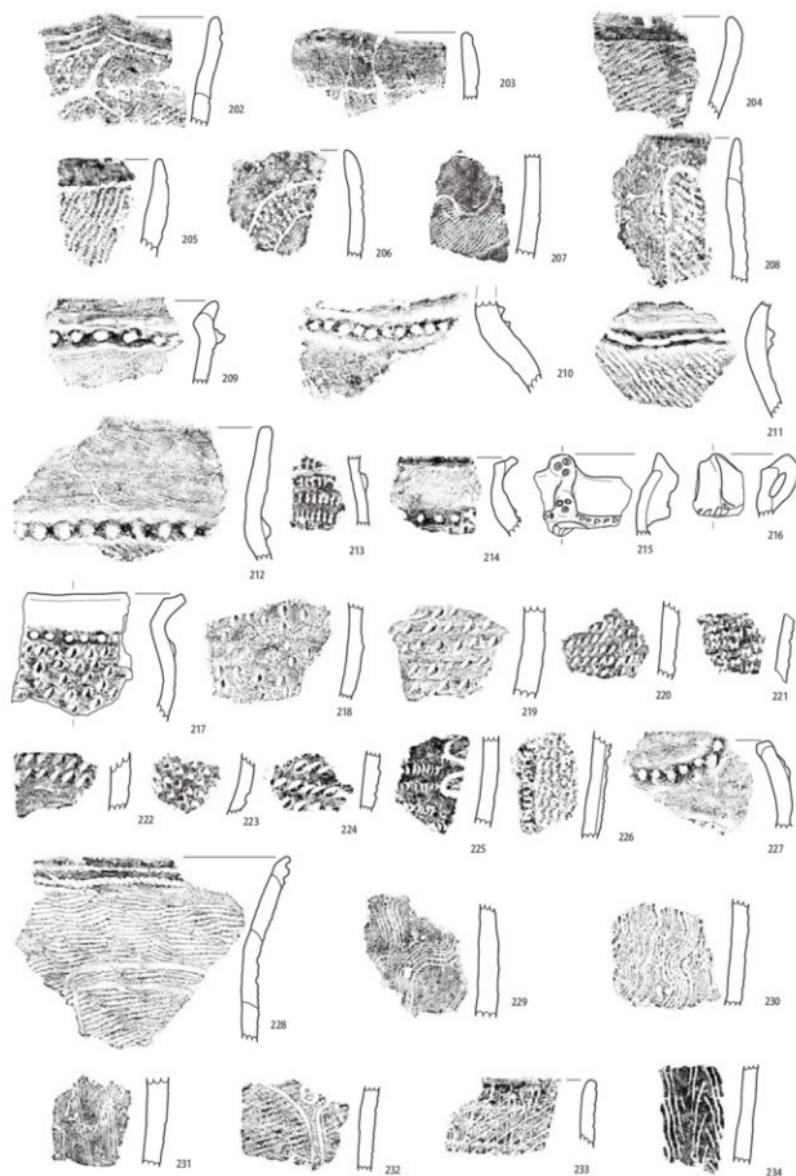


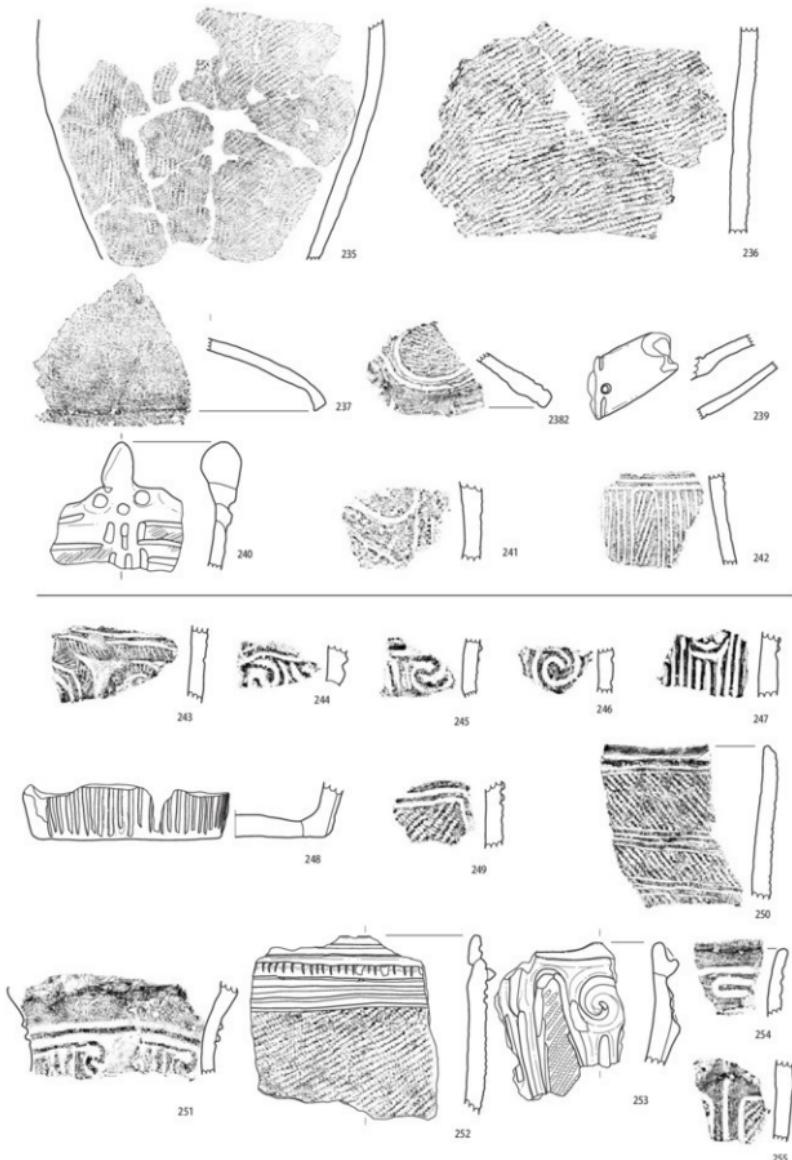




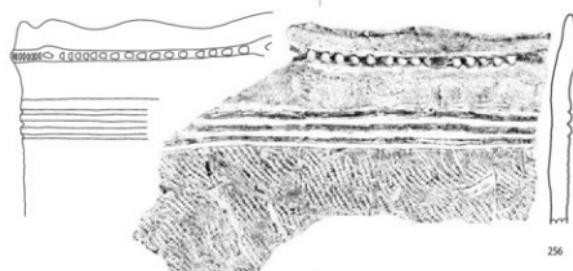


(183 = 1 : 4 ほか 1 : 3)





(235 = 1:4ほか1:3)



256

257

258

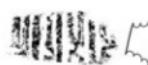
259



260



261



262



263



264



265



266



267



268



269



270



271



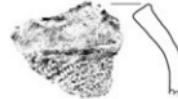
272



273



274



275



276

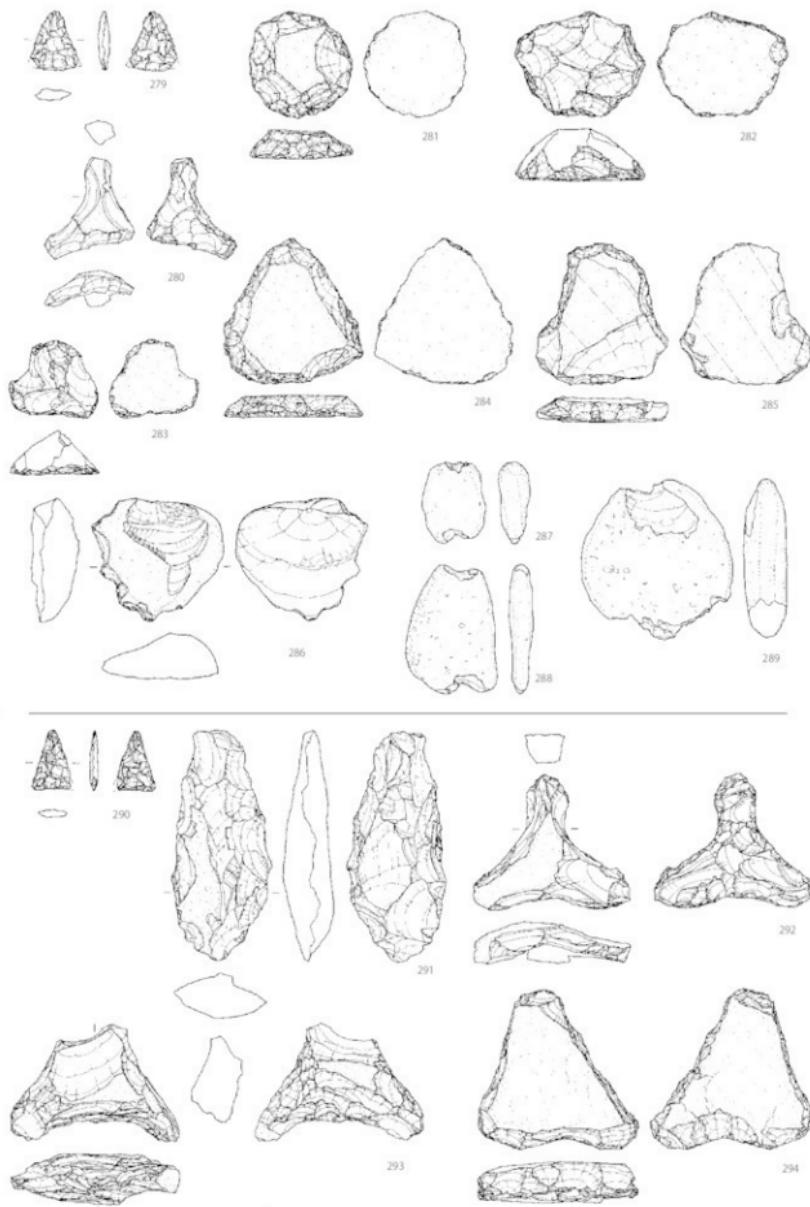


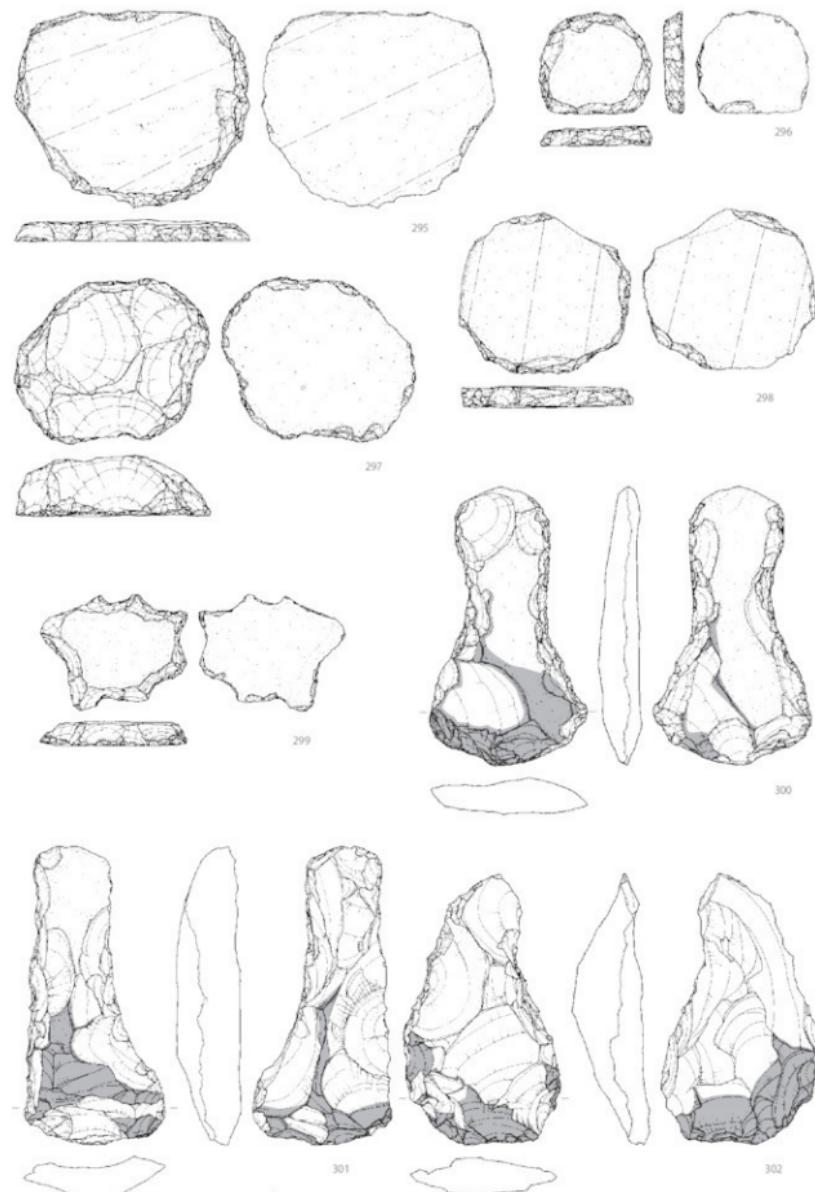
277



278

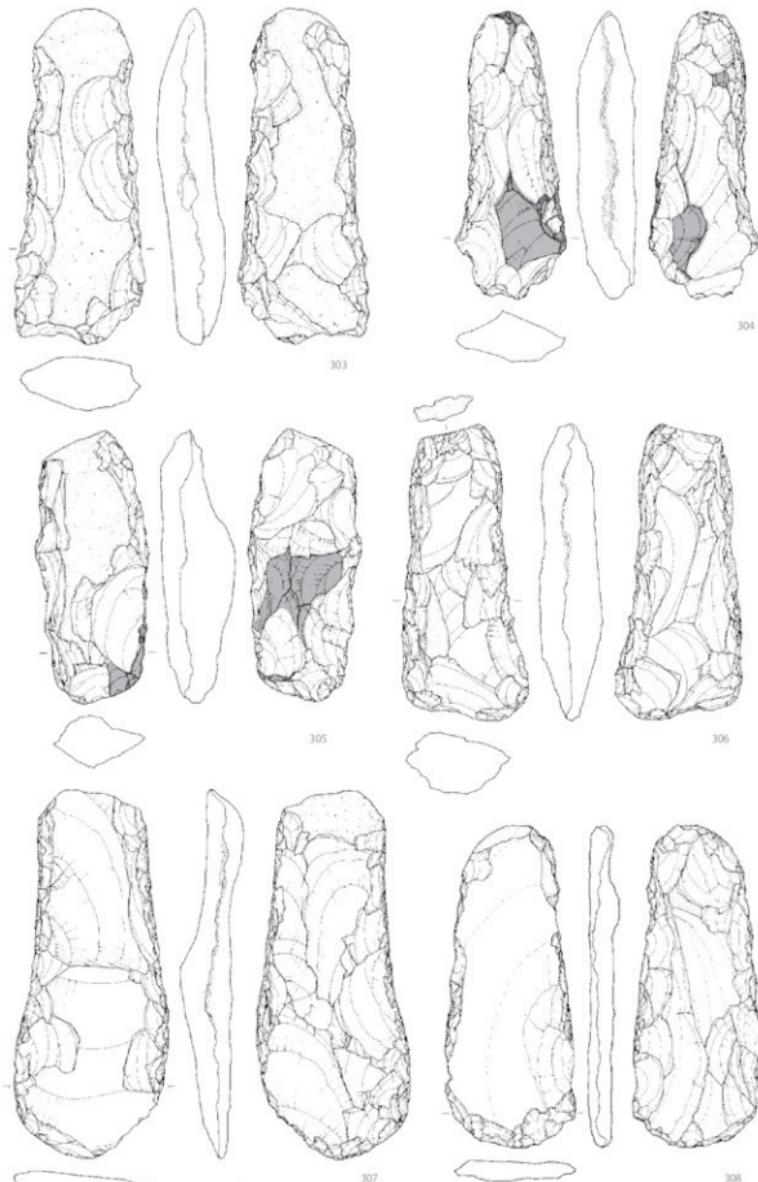
(256 = 1:4ほか1:3)





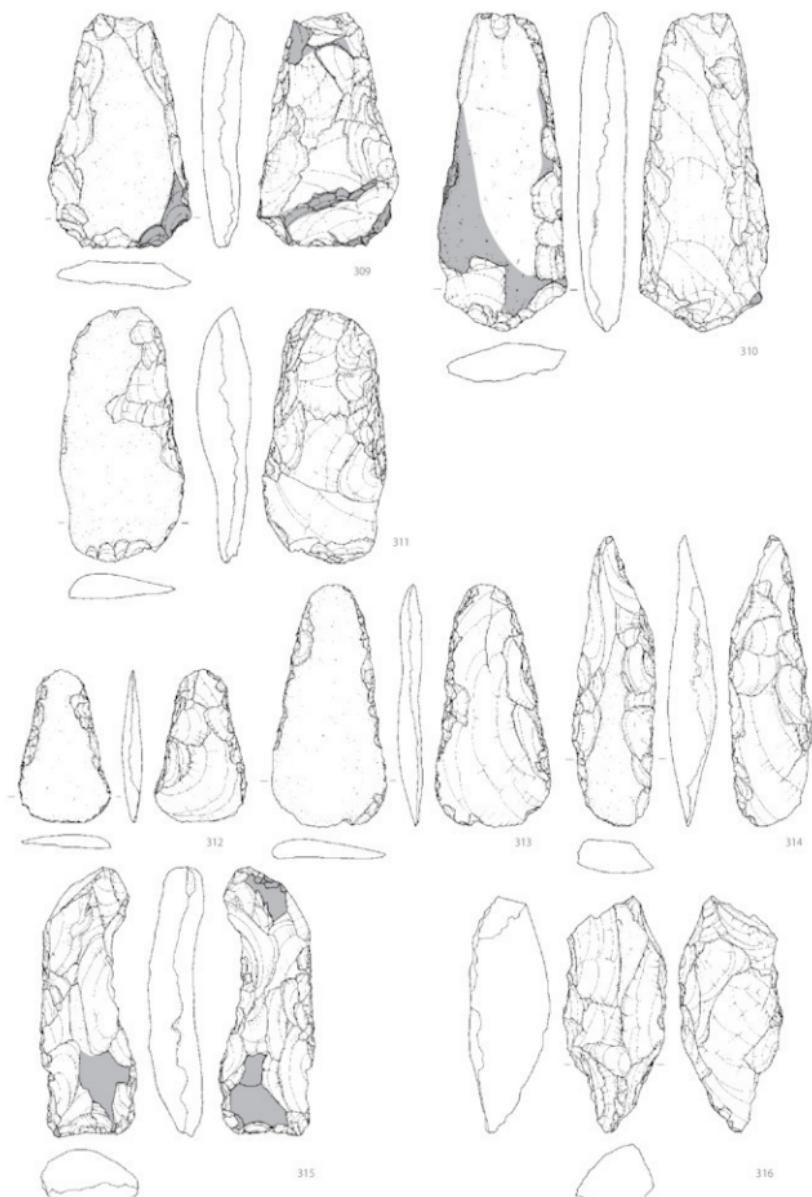
■ 光沢のある摩滅痕

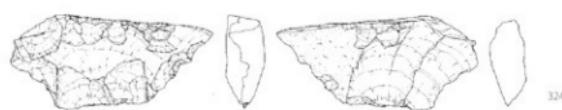
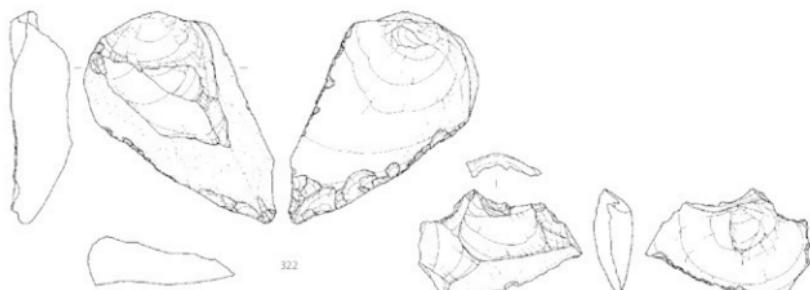
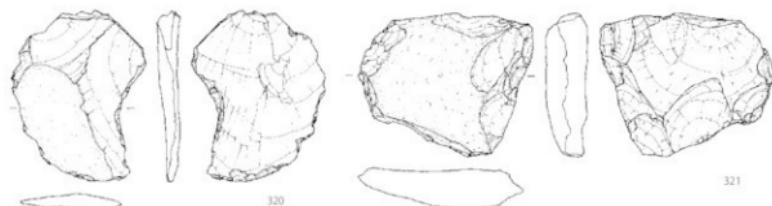
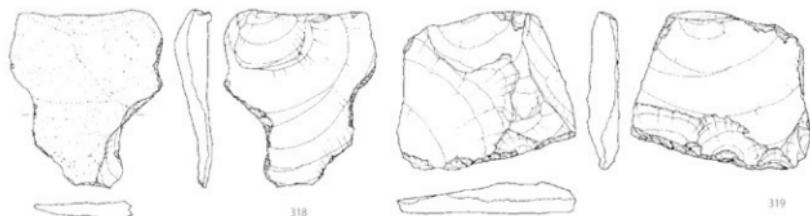
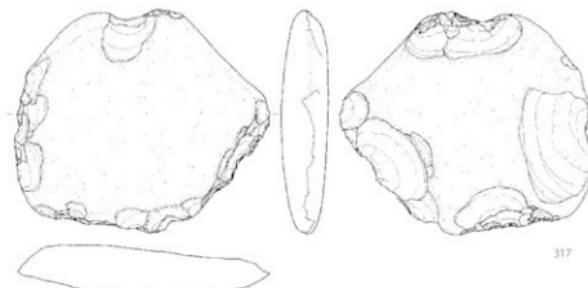
(1 : 2)



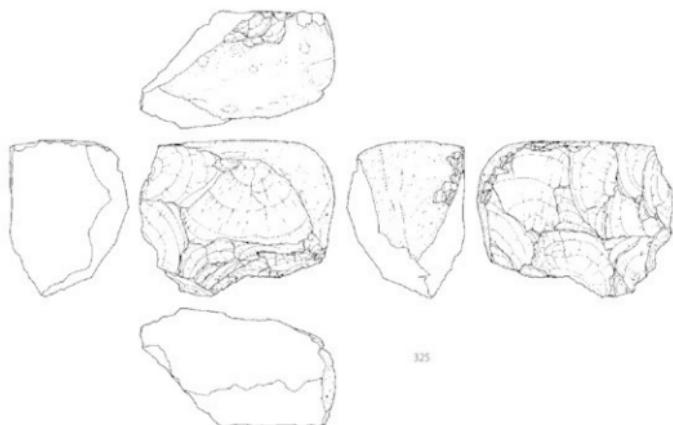
光沢のある摩滅痕

(1 : 2)

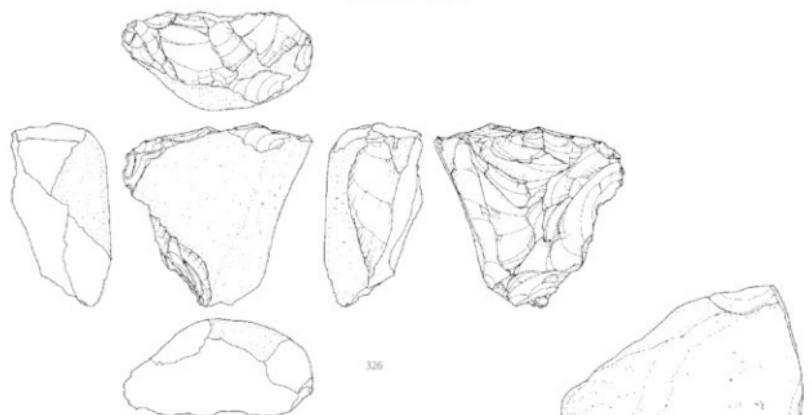




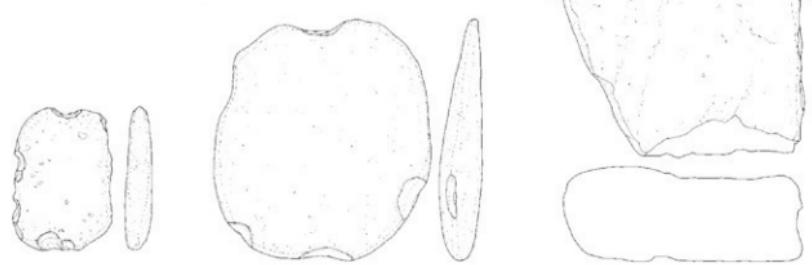
(1 : 2)



325



326

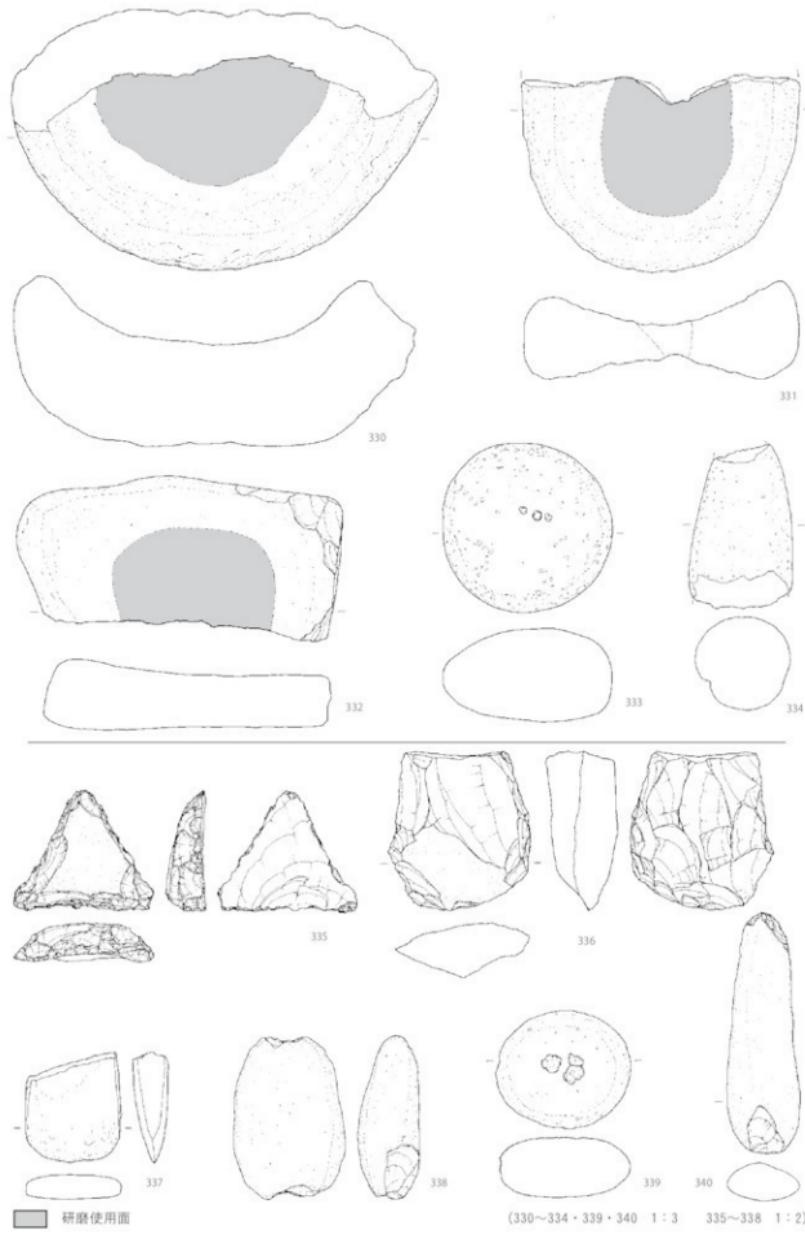


327

328

329

(325~327 1:2 328・329 1:3)





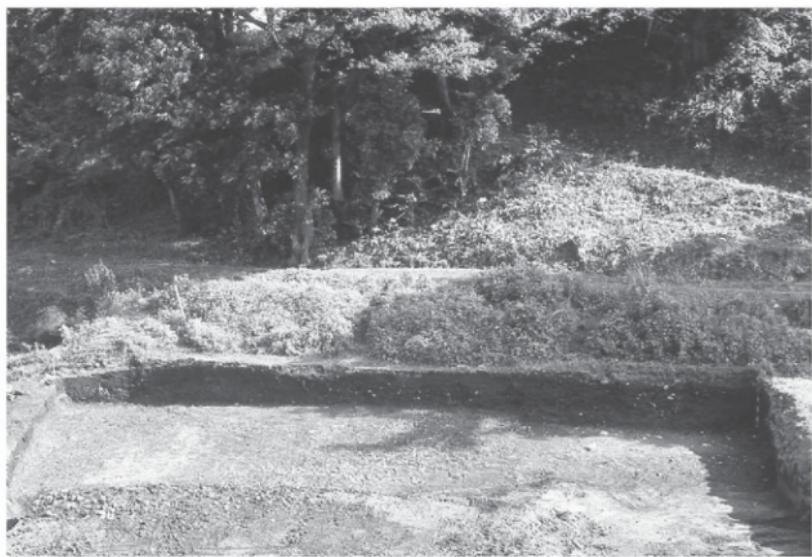
図版30 東側トレンチ出土遺物実測図② IV層(371~381) V層(382~390) VI層(391~399) 層位なし(400)



(400 = 1 : 2 ほか 1 : 3)



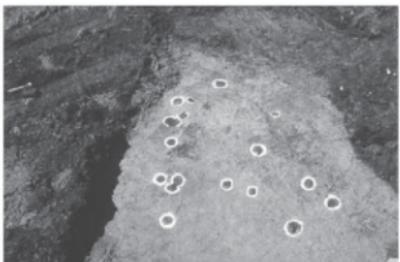
調査区遠景（北西から）



調査終了状況（北から）



調査終了状況（東から）



調査区外（東）土坑群確認状況



調査区基本土層（SPA-A' 西から）



調査区南壁・土層断面（SPB-B' 北西から）



調査区東壁・土層断面（SPC-C' 西から）



サブトレンチ設定状況（南西から）



II層 遺物出土状況（北から）



II層 木杭列検出状況（北から）



IV層 遺物出土状況①（北から）



IV層 遺物出土状況②



IV層 遺物出土状況③



IV層 遺物出土状況④



IV層 遺物出土状況⑤



IV層 遺物出土状況⑥



IV層 遺物出土状況⑦



IV'層 遺物出土状況⑧



V層 遺物出土状況（サブトレンチ）



VI層 遺物出土状況（調査区東トレンチ）



調査風景①



調査風景②



調査風景③



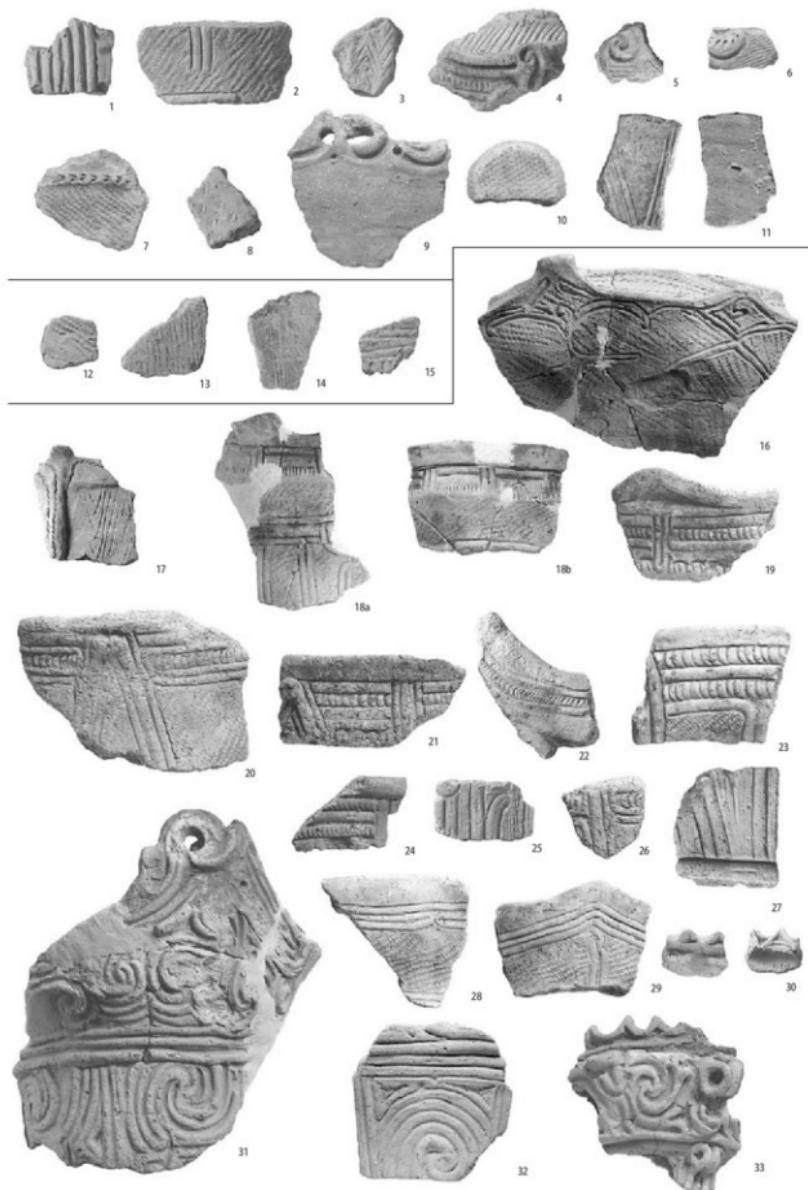
調査風景④



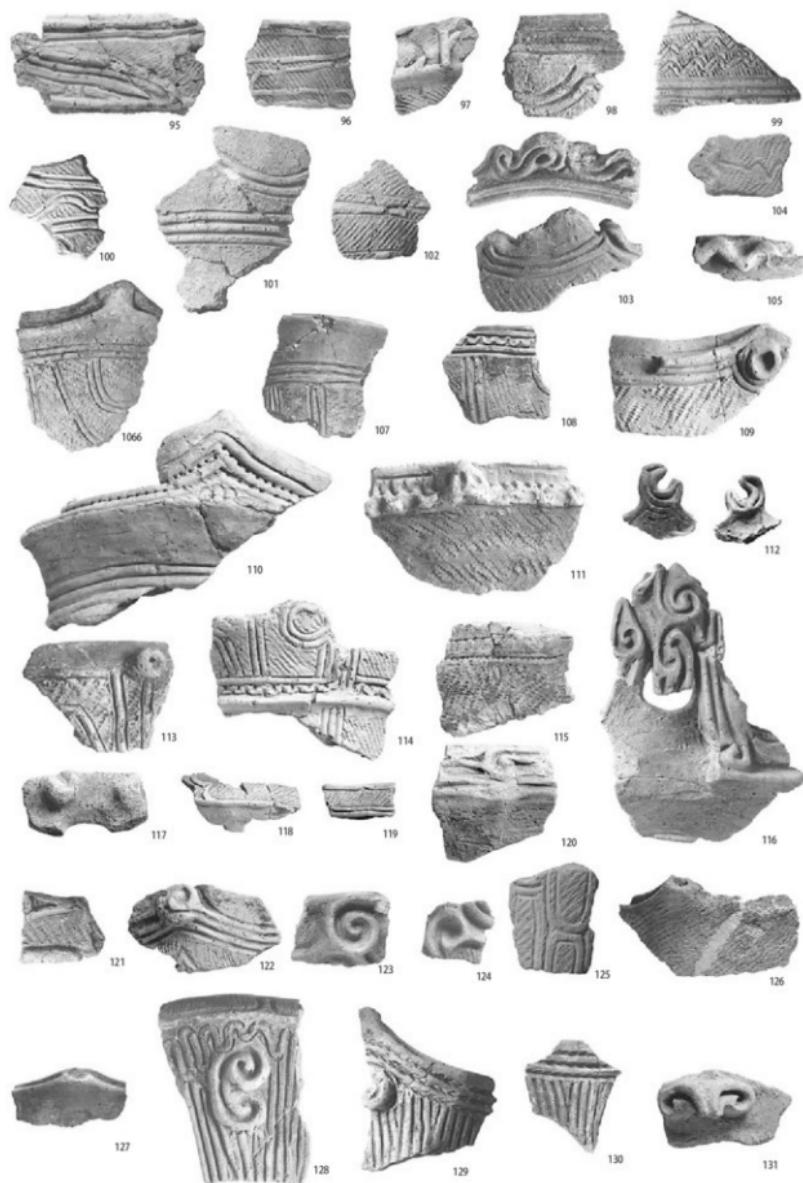
調査風景⑤



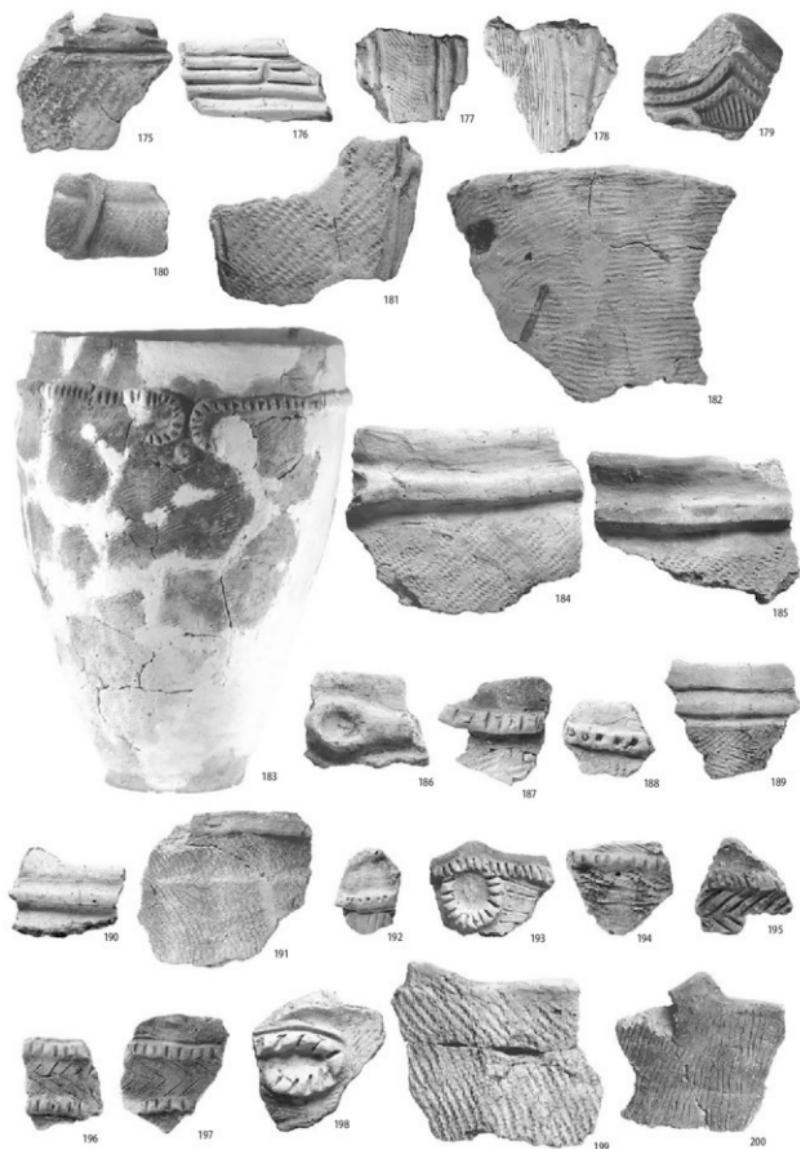
調査風景⑥



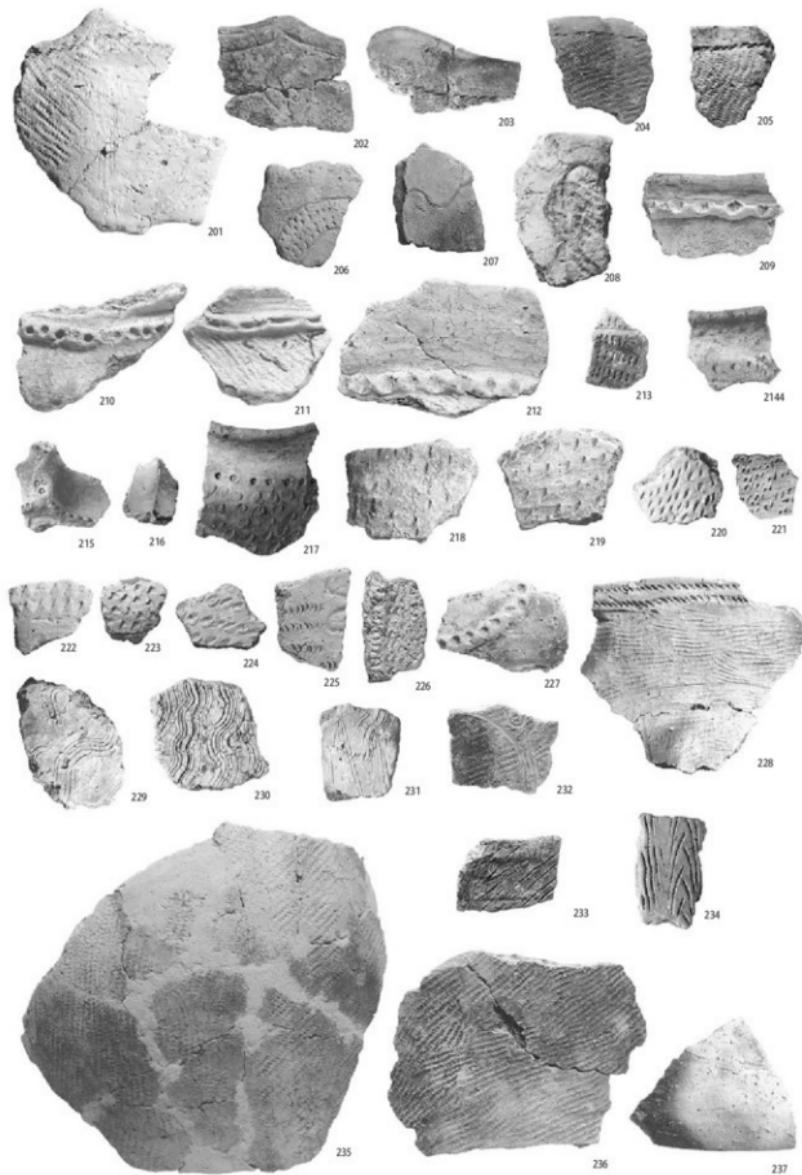




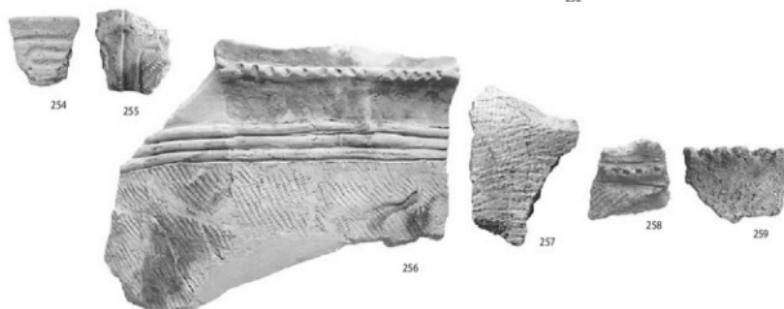
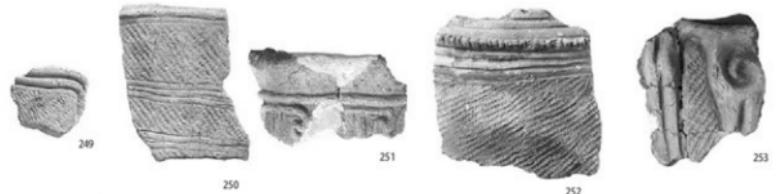




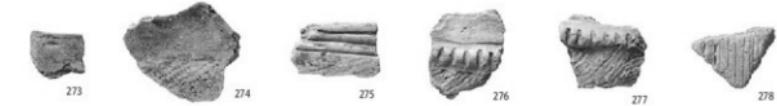
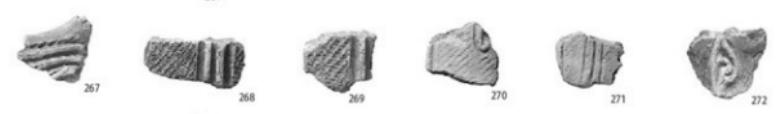
(183 = 1:4ほか 1:3)



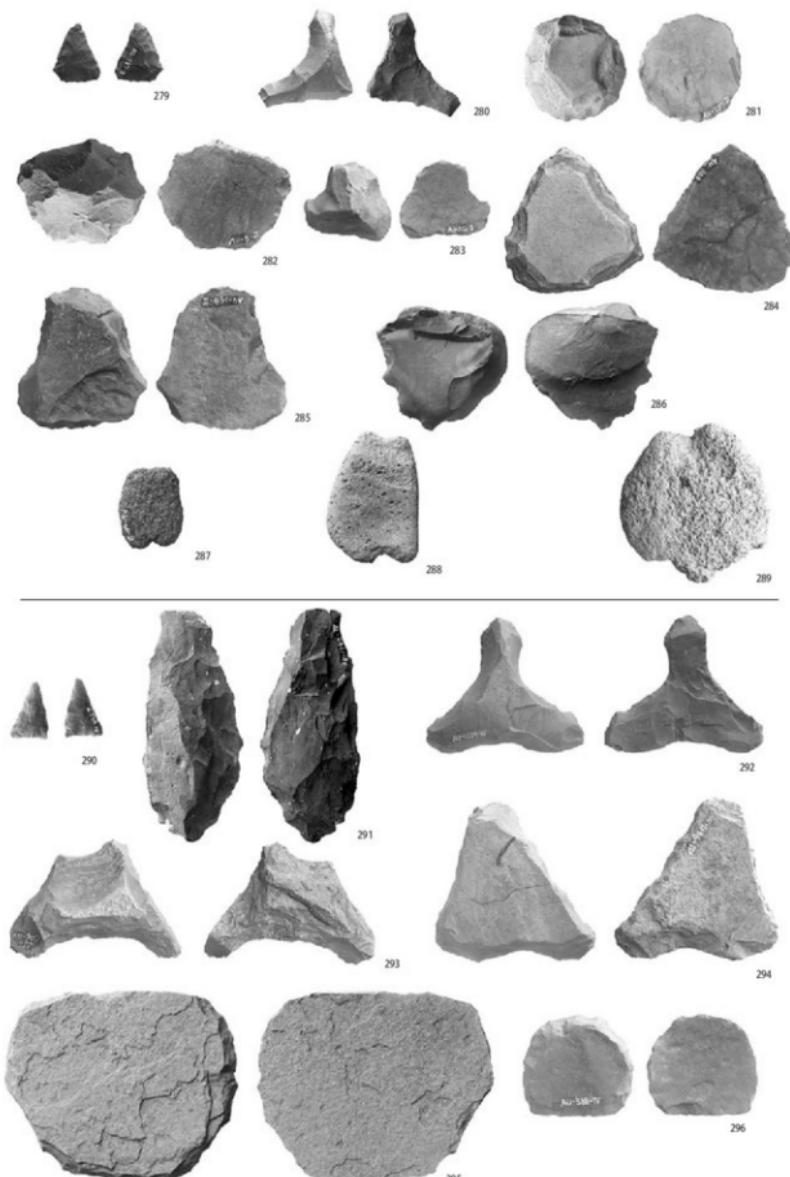
(235 = 1:4ほか 1:3)



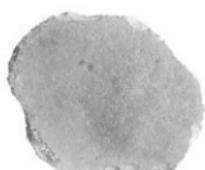
257 258 259



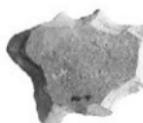
(256 = 1:4 ほか 1:3)



(279・290 = 4:5 ほか 1:2)



297



299



300



301



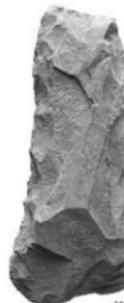
302

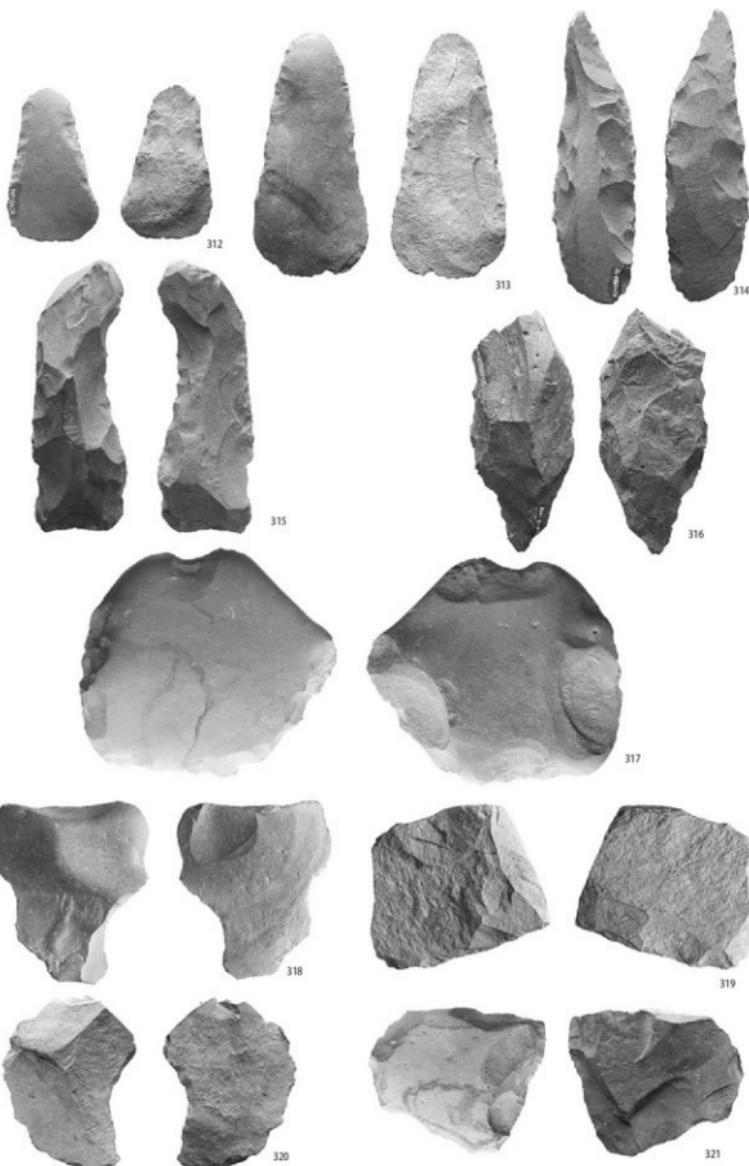


303



304







322

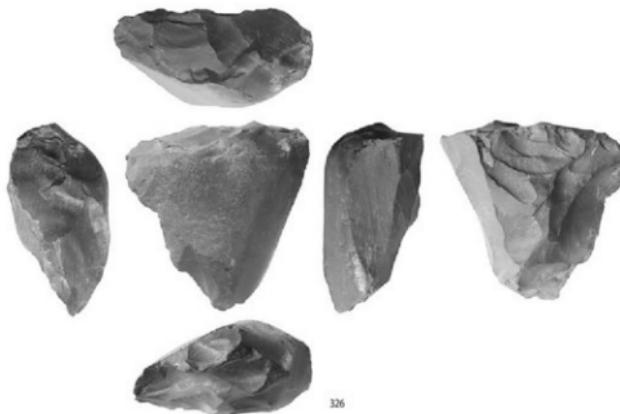
323



324



325



326

(1 : 2)



327



328



329



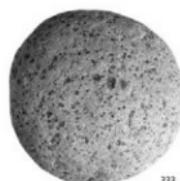
330



331



332



333



334



335



336



337



338

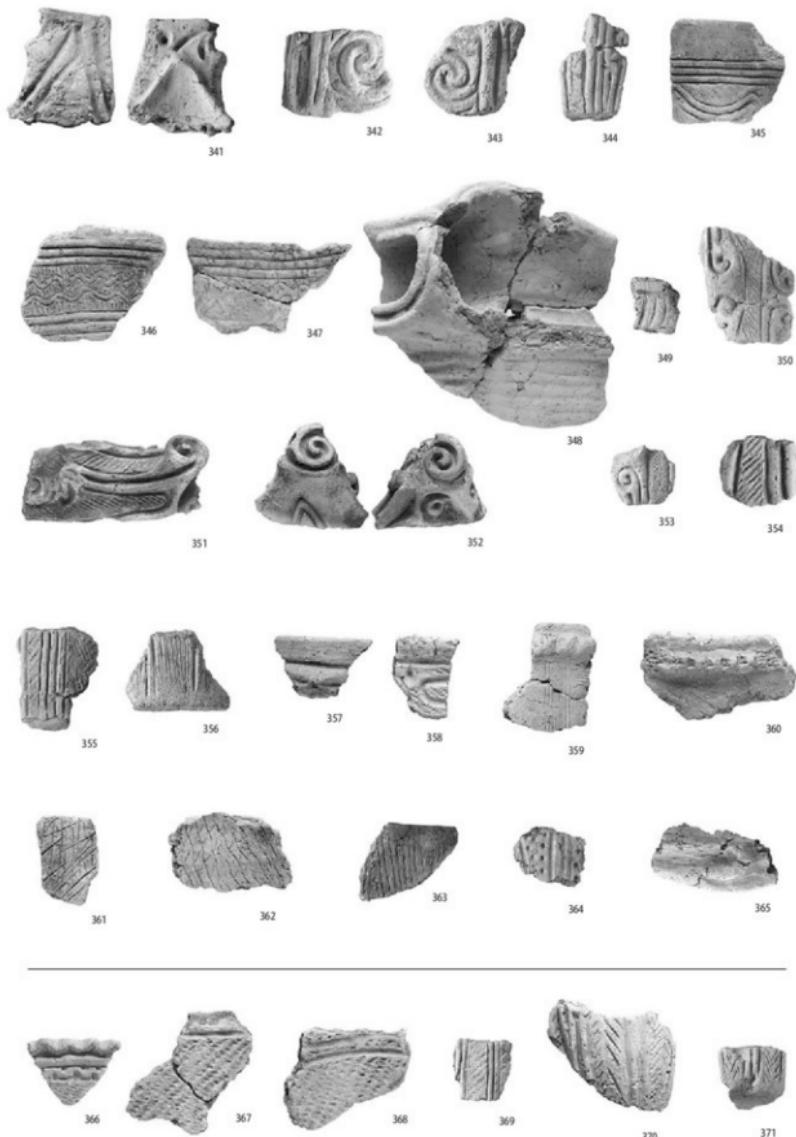


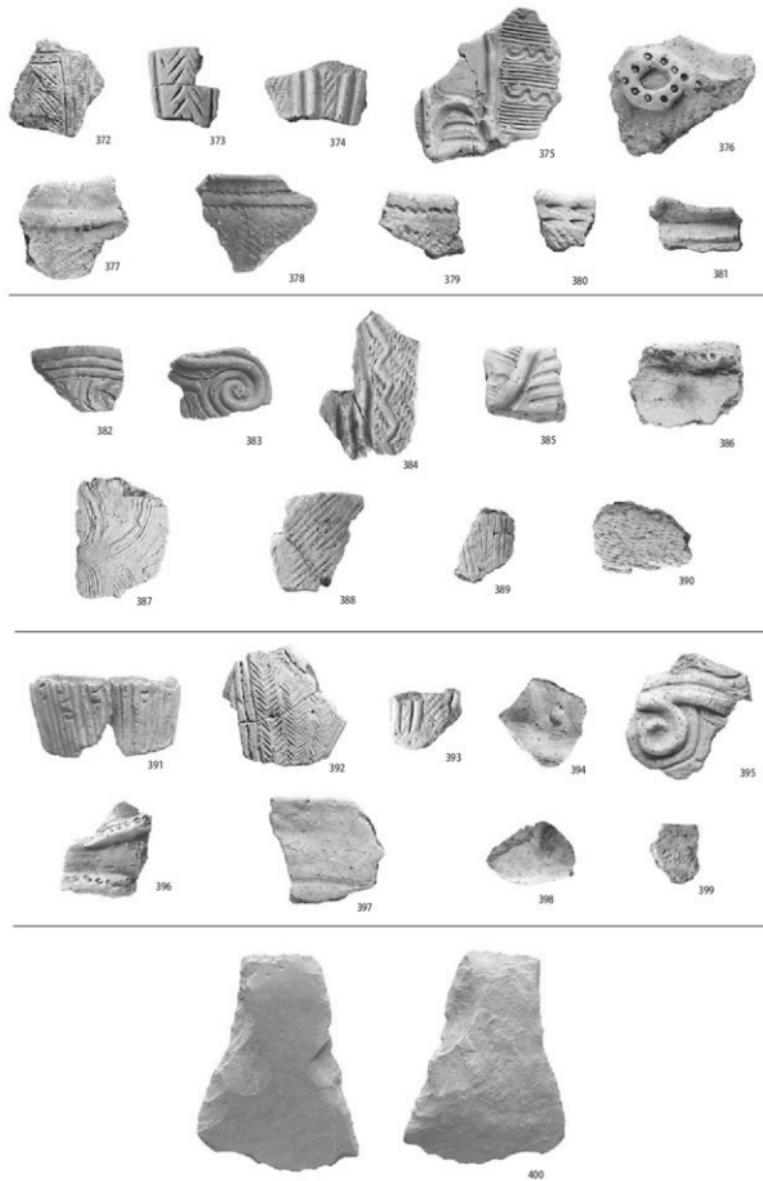
339



340

(328～334・339・340 = 1 : 3 ほか 1 : 2)





(400 = 1:2 ほか 1:3)

報告書抄録

ふりがな	あらまちうえのはらいせき							
書名	新町上の原遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（中里北地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新田康則							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2009年3月13日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
あらまちうえのはらいせき 新町上の原遺跡	新潟県長岡市小国町新町 字谷内田362番地	15021	546	37° 17' 38"	138° 42' 21"	20080610 ~ 20080702	160 m ²	県営ほ場整備事業
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
あらまちうえのはらいせき 新町上の原遺跡	遺物包含地	縄文時代中期前葉～後期前葉		なし		縄文土器・石器		縄文時代中期～後期前葉の捨て場

新町上の原遺跡

県営ほ場整備事業（中里北地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成21（2009）年3月13日 印刷

平成21（2009）年3月13日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 あかつき印刷株式会社